

られて土人形に替て埋しといふ夫等にやあるへきかそこより出入を醫師か持山へ行たりこの邊も陵めきたる所也そこには二階やあり山のうち見はらし宜敷所多くありて彼是三四町もあるへしといふそこにて父上は辨當のひさこなと屢くませられたり茸は大かこに二ツ千を以かそふるはかりとりてそこにて煮もやきもしてみな給たり女共其外各々山を所々はせめぐりてくれ／＼に歸りたり宅は我と市三郎留守番にて家來に泉水にてあみをうたせたるに大鯉二尾を得たりみなこもちにて味よし汁にしたるに大鍋一ツあり夫を用人給人其外へも給させて夕かたより酒のみたりおさといふ父上へ酒奉るに三丁も四丁もある所をこゝかしこにて女共の奔走することいとあはれ也下女を遣はずして江戸の八百善などにて物かふ様なることはなしといふ故に夫は我隠居のちを待へしわれ七十には必政をいたして遊ふへしとおもふなといひて笑ひし也

○十七日 晴 この頃一乘院宮にて郷射禮を御覽に入たる人のことを聞

せみしに紀州の御家老久野丹波守家來高木作兵衛次男高木直三郎事應心齋正朝と云ものに而當時は紀州御家來にて射術修行のものにて着服は素絹布袴にて帽子は燕尾といひ鎌倉時代武家侍以上は無官剃髪のもの着せしもの故夫を着するよし申たり實にしかるや侍以上などいふこと近頃の唱のことし足輕などいふこと前にもいふことく騎馬のもの也布袴はひた三ツ也といふ

○十八日 晴 きのは御清もすみたるによる五ツ頃より月至而よろし何分たまらすよつて庭の芝原へ行月をみたるにけしきいふへからす乍去さむければ市三郎に申付てそこにありたるくまてにて木の葉をとりあつめ其外木なときらせて焚火しなから月をみたりしはしありておさと來りて一壺の酒を携へてヒフを着てかしらは手拭をかぶりたりはんしものゝ如しいにしへの人のいふ月花の前に酒なきは清水にて泥足をあらひ花の木にフンドシをかけたると同じといひしもおもひやられて酒來りたらは

月の光を添ふるこゝろして焚火のわきに土瓶を置酒をあたゝめて白詩にいふ林間に酒をあたゝめて紅葉をたくといひし通のさまにていとおもしろし其内に松たけの土瓶むし出来てそれにて酒を屢のみて四時過になりて歸りて唐昏二三枚かきたりそれにて今朝六ツ時より起て例の槍劔を遣ひたり十七日の月は十三夜と同じことなれと光弱し夜ふくる故かとおもふに左にあらず日光に遠くなる故なるへし薛文正か説に廿三日より末の月の光よきは日を負ふて出る故也といへり廿六夜などを賞するこれも同じ意なるへし

○十九日 晴 けふは法蓮村といふ所にて與力同心共狼烟をあくる奉行よりは幕五張に米壹斗の握めしにしめを出す例也四五年に一度の事なれば祭禮のことし方四五里内の人集るといふ也與力らの妻などは帯をこしらへ衣類をつくりて見に行といふ也○西洋のこの論をみるにみな空論也千言万語ありてもつまりは和と戦ふの二字におつる也力敵して戦ひ力

敵せずして和す彼と己とをはかりて此人は年齢何歳位也虚症也實症也といふをみて醫のくすりを與ふると同じこと也其論を外していふはみな不用のこと也いかにおもしろく書ても論策の文章のことし少しも役には立たぬこと也儒者等之論は人にかたれましといふを先にしてかく故に醫論は尤にて病の直らぬこと多し孟子か滕公齊楚を恐れて相談されし時に周の大王の狄に土地を與へし例を引たるにておもへはいにしへより同じこと也今の儒をわるくいふへからざる事也この事新右衛門心得のため記す也こゝの根本より論すれば當時の御爲の論立也よく心得らるへし○與力らか狼烟の合圖にほらかひをふく也このほと頻に習ふといへと初學ひ故に其こゝろはかれし老人の風引たるかことし興福寺などには法用の具ありて日々いたす故によく聲の立也夫をやとひてさするかた早し大筒をつくるは鑄物師よし水もりは大工よし夫を遣ふは矢張遣ひてにあること也世にかゝ類の迂なること至る多し

○廿日 くもり きのふは狼烟にゐ人々行たり歸りてきくに三條通といふは大坂みち也その通り之村々のはたけ中はいくらもかゝりをたきつらねて方壹里はかりに星をつらねたるかことく又與力らか家内等みなく幕うち廻して所々に見物して居たり御門主は法華寺御所に御成にゐるこにて御樂あり笙鼓の聲しきり也例の野原にてめしをくふことを好む土地なれば所々に夥出て酒のみ歌ひ舞ふもありて其さま陣中夜かゝりのことくもみえ畑中にてよる酒のみたる躰は狐にはかされたる躰も有さおもへは松火の星のことく成は狐火にも似たりなど民藏歸りてかたりし也わか見物所もあれと多く入費かゝり市三郎などは少々風邪故不行與力之殘念かりてせめて民藏になりと終迄見居くれと申故に同人は終りまで居たりと也宅にてはうらへ見物所をこしらへて一同参りたり今日なら中の酒はよほとうれたるへし○不二孝一件之本多侯より之書狀來る

○廿一日 晴 昨夜柿獻上之御奉書相届○きのふ忠六一件に付申渡之趣

等一覽且忠六等之書物をみるにいにしへ日本にては唐より傳はり候事をいふはかりに而夫も明經紀傳道等之博士か或は搢紳の人々の書生となる人々など專にて文學全にひらけず其後武家の世となりては尙更也しかるに御治世三百年文運ひらけて上下ともに文字をしるされ共教導の法なし人々の好に隨ふのみ也よつて學文のこゝろありて出來さるものゝ年をとりて与風文字に携ものいろくのことをする也其流心學のことく又一轉して不二孝のことし彼らか書をみるにことく儒者の悟類語録のこときもの也只異端外道といふ迄の事也所謂花になく鶯水にすむ蛙にて教をうけすしておのつから理をかたはしを言て外道となる也こゝにいたりておもへはいにしへ聖人の郷學を設玉ひて愚夫愚婦迄の耳までもよきことをしらしめ給ひて力あるものは夫よりみちに入しなるへし不二孝などのことくうちにも相應に出來るもの共はみな道理にはさときもの共故に道理の上おもしろくなりて却る異端に墮る也可惜もの也上の御教導によ

りてみな一もとの學者になるへきものなるへし聖人一代之樂を定め給ひてよき正音のもの、雅にして淫聲ならぬものにて樂しむことを教置給ふ故に人夫をたのしみて淫聲にならずしてすむ也ならのとき猿樂と雅樂とありて身分のものは決して三弦などひくものなきを以江戸の御旗本の歴々といふもいやしき乞食非人のする聲音絲竹をたのしむの多きをみるへし人のたのしむこと或は道ひくこと先ッ定りあれはよきことをたのしむ也夫かなければよからぬことをする也不二孝のことを歎してこのことを記す也

○廿二日 晴 昨夜内藤左衛門檢見序之由にて來る久々にて江戸咄なといたし酒肴めし等差出候夜五ッ時頃まで對話いたし候左衛門は三好庠助と申候南御徒町の御徒にて霞舟先生の弟子にて左傳をよみわれも行たり其後互に轉變して小普請奉行御普請奉行之節とも世話いたし遣し又此度わか支配國へ來りて申談等いたすめつらしき事也左傳をよみ候

節は我十六才也といひき左もあるへし

○廿三日 晴又雨 此ほど追々にもみちよし庭など芝生まで紅にうつる也春日山のもみち其外共によろし

○廿四日 晴 きのふ育介來りて書經堯典曆法の論をしたるによりて昨夜中欽定四經大全などをよみて今朝其論をしるして遣したり其序に孫子國字解の徠翁の説をみて孫子をみるにいろゝの事をわれ書入をし置たりわか子孫にもこの書入をみて直してくるゝ人ありたき事也上にて親の書入也とて持居り下にて書入もしらす賣て仕舞也かなしきこと也この日記のときも又しかり子孫のうち一度を目を通すへきものありやなしや○昔高田屋嘉兵衛は魯西亞之島國スカムサへ行彼國の役人と對話して日本の境等を定め蝦夷の千島のなみを治めたりわれ夫に付おもふは我壹人を紅夷の船へ乗被遣て英夷其外之西洋各國をめくり來りたしかなることをしり得て歸り來り御國の御爲をなしたき事也 大猷院様御代には七

年西洋へ隠密を遣されたり此こと二度迄あり又間宮林藏も其ことを加賀守殿に願ひて御勘定奉行より進達したり人世百年のものなし千年の墓なしかゝることにていのちをすつるは少もいとほぬ也嘆息してこれを記す

○廿五日 晴 御用狀來る○母上様倍御機嫌克其外に御無事目出度候○太郎之清書來るこれも又新右衛門之世話とみゆ太郎の清書を遠國にてみるは一喜一哀也太郎わかまゝにてつけあかり甚しと聞く是は申候迄も無之孫の三百下りの十倍ひこの三貫下りなるへきかされ共密におもふは敬次郎は母の手もとにありなから左もなき様子この頃も申遣したる通也しかるに太郎右之次第井上にて一同打よりて過愛甚敷によるなるへし忝とも何とも可申様はなし酒を買ひて尻を切らるゝ譬のことくなれ共何卒新右衛門夫婦嚴敷して屢土藏などへ入られ候様にと其ことを申也母上へ申上候も御取用いかゝあるへきやと此ことをしるす也

○廿六日 くもり 大に暖氣也此ほと稻刈になりたるに大にとりみ減し

たるといふ也大坂は米をあけたるなど云也

○廿七日 雨 御用日白洲に出る○藤左衛門之行書此節はいかに一覽いたし度候御序に一枚御越可被下候○新右衛門日記之内脇坂にて月見かけ物の様子月をみるに當時の立野侯は先代中書公より文雅は大にまされるかことし先代は豪傑は上もなき人なりしか文雅なることは少かりき乍去東江風の草書一變したる老筆の書狀などは又世にたくひすくなきまてにめてたくかゝれし也

○廿八日 雨 きのふは與力共之内御取締懸二人是は組頭のことし酒をのませてちりめむ羽織壹ツツ、遣したり與力二人之内筆頭は殊に外作法正敷めつらしき位也能二番もみる内に刀のつかより外へ目を動かすといふことなし書をよくし少々文字ありて禪學をする也○此ほと大坂にて開板する積に大和誌の作者也二筆は豪氣ありて正直にて御用向をわか家のこととする男也五十六にて毎朝劔術など遣ふ也砲術劔術馬術其外御用向

共此二筆みな引受也才智は筆頭ありあれば又一失あり智といふものはいやなる所あるもの也袴を脱たるをみしものなしといふ位也酒のみても少も不變二筆は酒のむとわか家にて子供相手に酒のむかこときさまする也人はいろくもの也され共二筆のかた御用向に氣遣ひなし筆頭は御役人ならばしくじらすして身上よき人二筆は必しくしりて身上わるき人の上たるもの其身の行跡の修行に人を遣ふへき事也

○廿九日 曇 立田の神主の欠込訴寺社奉行衆を來る其内不如法其外之義もあれは風聞糺に出すさて其書面に與力玉井金七郎は一番の口きとあり此男は與力末より二人メにて組一番の口をきかぬ男也其上に右之一件は四五年もかゝり居たる一件にてわか初しらす一吟味にて濟口になりたる一件也夫は奉行所之正徳之書物に双方連印之證據分明にて一言もなく負たる也夫をうらみていろくのことをいふとみえたり風聞糺を欠込訴人之行跡をもたせさてかく不法なることを江戸へ申たればとて決し

て憎みて風聞たしすへからすとわけて申付てやりたり

○晦日 雨 岡本近江守よりおさと兼おたのみ置たる手本來る近江守も八十三と申老年故に手顛て眞はかけすとて行草にてよみうた紀行詩作なと書て越したりわれへもいろく書て贈りたり近江守は三韓人の恐たる詩人にて清朝より岡本の詩の和韻をして越たるといふ位の人なるに氣之毒なれともわれより返禮の排律の長篇一首と清書一枚おさとよりは奉書へ百くたり余の消息文をかきて墨なと添へて遣したり

○十月朔日 曇 月並の禮受ること例の如し○とし月のいるかことくに立はしらすことしも九十日はなし江戸歸るか夫たけ近しと喜も可笑こと也○廿九日は夕かたより晴て過暖けしからぬことにて春社清明の頃のことく庭のもみちいふはかりなし八半頃よりおさとともにもうたよまむ庭のもみちのもとへ行すやといひければおさとみつから蕙なと持行春日山

のもみちをみる所の山にしきて矢立かみなともち行て二人して頻にうたよみたりさすかに夕かたになりければさむしおさとの計ひにて庭の柚の實を二ツ三ツとりてそれをさかなにしてしはし酒のみて又うたよみたり御兩親様にも被爲入候へと申上たるに母上はさむしとて御斷也父上御出也日のくるゝまで庭に居たりならのもみちは緋ちりめむのことし燃立かことしかすか山の紅葉臺といふ所の紅葉黄葉うちましりたるけしき中々筆につくしかたし

○二日 曇 世々の奉行を用人給人へ下掃除之方にて出來秋に一度もちを振舞こと也いまた行きりければこの秋はもち米もよく出來たり是非といふ故に用人給人共は斷て家内と子供とを遣したり江戸最寄掃除のことく亭主も子供も來りて糞を荷ひ行ことなれば其氣にて行たるに立派なるうちに土藏の大成か三ヶ所もある故にいさゝか驚たり掃除夫婦のもの門前に出迎て坐敷へ通したるに用人給人の妻子の通る上之間にはみな毛

このこと
な多も
東照
宮の御
武徳上
御威光
は公儀
御恩の
也容易
ふへか
らす

氈を敷て其上に唐さらさの坐ふとむをこと／＼に敷まうけて金屏風なと立てありこゝにいたり筆頭の民藏のかみ大におとろきていさゝか足の置所手の所置をしらすやかてあづきもちを出したるに菓子盆など眼を驚すはかり也もとより赤小豆もちきりの心得故に子供迄夥食したるに夫が段々いろ／＼のもの出てみることに食ふことみな新奇にて内心驚歎せすといふことなし畢にうす茶出たりこゝにいたりて面色赤小豆のことくになりて服紗さはきに困窮して民藏妻其外讓合ふこと屢也古人云窮スレハ必通すと困窮より一奇計を思ひ出て傳へきく茶の湯といふものは茶碗をとりて一口のみて次へ廻すこと也といさなすへしとて一口のみ次へまはしたるに又そめか前へも茶碗を出したり是はと驚ケは段々と茶碗出て濃茶にはあらすうす茶也けりと也掃除夫婦はかりに目八分に配膳して其儀尤巍々たること也と也われ察するに膝栗毛三四篇の躰をみなかねたることなるへしおさとときくことに笑にたへすして腹をかゝゆる事也

○三日 晴 めくらあんまあり夫か娘の四才になるをつれ來れりみれは空いろのふり袖にて模様もの也江戸ならはさんとめ位やう／＼のことなれと上かたはみなかく風俗のこと也木綿の模様ものきることは田舎には多けれと江戸には少きこと也この二日三日の躰にては上かたよき様なれと金氣はなし奉行の仕來にて大名より貳朱の目ろくをくるゝことあり與力同心なと小玉銀なるもありと也江戸の難有ことおもふへし

○四日 時雨 きのふ川柳をきゝて感服したり其句は
鏡見て親父のへのこうらみけり

と也これはわかき人の朝に起て齒を磨くかはしめに浴み梳りこゝろをつくして後かゝみに向ひみれとも容貌の醜惡なるを歎きて親をうらみたるもの也わかき人のこゝろ惡へきにはあらぬ也われ今天下の人の心はさら也諸藝にいたりて親をうらむるにいたりて成就なれ共親うらむるにいたる人をみすみな親より賜はりしよりわろくして親のかたよりみな子を

うらむ也筆算學問弓馬鎗刀其外のこといたりて鏡に向て此上は人力の及はぬといふ其極にいたるもの世のなかにありとしもおもはすみな天より賜はりたる半分もつくさぬ也わか庭にきくありならのうちにてよき菊のたねをもらひて家來のつくりたり去年はか成也ことしはつくらされは十種之内八ツ迄は黄に變してはつかにかたはかりを存せり世の人の藝われらかすることみなこの菊のことし誰かは親のへのこをうらむるにいたるへき

○五日 晴 市三郎しめ治をとりに出たりしめしにけしからぬ大成もあるもの也さしわたし六寸より七寸なるかある也其味いふへからす松茸のかほりはあらねと汁などにするに魚類より甘美也

○六日 晴 此ほとおさとける／＼久々不起それは近頃勘考して自分と躰の筋をもむ也軽く起るきさしの節は夫にて直る也尤日々夜々しはしの間も筋をみつからまぬことなし先代齋藤嘉兵衛か珠數のことしこの頃

はみつから得たる所ありて足のこの筋もめはよく通するこの筋はこゝへ通ふなといふこと十四經をみなから説かことし不思議なること也はしめわか筋の論をするを笑ひしか近頃は遙にわれに過たり

○七日 晴 京都より寶藏院之後見歸り來てのはなしに齋藤彌九郎之倅京都へ弟子二人召連來りて所々にて稽古をしたるに以前團野源太郎は五十に近き人故柔に遣ひたる故に名人也とて感したるにこのたひは廿二歳の若もの故にけしからず働てしなひへかけて人を投或は強く打られて勿論少も不當よつて神か鬼かのことくに人々いふといふ風聞を聞來れり

○八日 晴 おさとのけろく起らざることを稱したるに又起りたり例之通也この女けるく奇病也更に起らぬこと二年あらは必外に以之外の病を生すへし胎内妙合の時よりある病なるへし夫故に薬もきかす死するかとおもふはかりに煩ひても即坐に平癒してつかれす一滴の薬を用ひずして直るといふにてもおもふへし

○九日 晴 此ほとさむさに向ひて例の通我こゝろよし常のことなから霜ふり井よりけふり立ことてなると健也例之通六時頃より起て鑓劍のすこき其外をする也けふ試に櫛の大棒に一かたに千三百はかりすふりをしてみたるに少もくたひれすこれにてはよろしかるへし乍去常には母上の御沙汰もあれはかくはせぬ也息合其外力以前に少もかはらす氣根は少々よくなりたるかことし只こまるは年々寐られぬ也このほとつとめて四過に仕舞一合の酒をのみ臥りていかにしても八半位に目さめ夫よりいかにしても寐られず寐らるゝ時は必病ありこれには實にこまる也無事の御用狀來りても其夜は寐られすこの頃は寐さけをやめてみたるにのむと少もかはらすされは不益のものなれば字にても書とぎに限りのむ積り也

○十日 晴 民藏夫婦立田へ行法隆寺のいにしへの躰をみ且立田川のみちを見て來りたりもみち百六七十より二百余もあるへし立田川の左右にありていまさかり也といふけしき也と也立田川は六七間ばかりの砂川

にて一尺はかりなる深さの水にて底にいる魚よくみゆるよし也水面も其あたりもみな緋ちりめんのことしなといひきともに行たるものうちこゝには百人首のうちうたありとか申て名所なるか實に驚といひしに夫よから紅になにかいひしといひしと民藏妻いひければあなたは御うたよみといひしと也其外ともに行しものうち右に一言の外雅言なかりきと也四顧寂寥としてみる者外になしと語りき不運なるもみちか或はつまらぬうたなと人の來りてよまぬをもみちはよろこぶなるへし今の立田川はいにしへのうたにある立田川大にこと也今のもみちは後人の立田川といふによせて多植たるものにて夫故に俗地也と申也

○十一日 くもり 此ほと稻を刈上てみるに更にとりみ少し次第に米高直になりて奉行所への書上は上米九十二匁内實は百匁以上也と風聞する也奉行所之書上やすきは市中此ほと石代直段を大和一國御料所の石代となる也夫故に御料所百姓共米屋共へ金を遣し此ほと石代の表相場を立もら

ふこと也この弊越後其外御料所多き村々にいつもあること也石代三匁も違ふと御取箇はよほと減するわけになる也乍去民はゆるむ也御料所の石代よほとこゝろせねはならず別ならしの願石代にいたりては大なる偽ありて其筋のもの大に潤ふこと也○此米日々上りて表向も百五匁ならしに成尤上米也

○十二日 くもり 此ほと與力か書し黄昏に其旨村役人に答置候とは乍申と認たるを申聞置候とは乍申と直して扱ふかゝること多し文章に倭臭あり雅文にさとびことはあり奉行所の書もの俗談平話にして下人によくわかるをよしとすされ共倭臭さとひことはのことく俗言のあやまりを奉行所之書物にはなりかたし譬は腰懸を御腰懸といふ類やゝもすれはいふこと也よく差別して書へしと申聞たりわれ田舎流義の吟味書を少も直さす文段またしかり乍去これは書たりし男よく筆のきくわかものなれば教置し也其時申聞せしは御觸書など一國觸をするに決して六ヶ敷ことを

いはすかなを交ゆるもよしされ共かな違ひのヒとイキオとヲなどの類はよくたし辭は少々うちあかりてかゝすしては奉行所の辭にならす耳近く雅言ならすしてあやまりことはあやまりの熟字なくきり短にして意のつらぬくこれ御觸書の躰也と申たりき○去ル十日九月廿七日までの御用狀來る先以母上様御機嫌克其外之御無事目出度候○佐州之異國船參り候由いやなる事也西洋船對州の間を通り夫々佐州へ廻り蝦夷地のからふと、そやの間を通りてカムサスカ其外之廻り候義はレサノツト或は又ホフシトフとも云此人長崎より歸りにはしめて廻りて日本の北海をうかゝひしといふ也この説據あるかとし安永の地球圖に日本の北海に針路のあとなし徴とするにたる也南海に二艘北海に壹艘ふねありては日本人奔命につかるゝ也奔命につかるゝとはあちらこちらへ走廻りて國のつかるゝことをいふ也左傳の字也歎息せり良策のことなにかあるへき良策は器也人は遣ひ人也遣ふ人あれば良策おのつから出来る也遣ふ人なければ

良策少も役にたゝぬ也良策は人ありてのこと也みたりに策を述ふると遣ひてはなくて却る万一異國へ聞ゆると大にたねにさるゝこと也間宮林藏へイキリスの醫者より手帑をよこしたるにて知るへしこの頃ある人の答たる書あり左に記すわか詩文章のことは林大内記佐藤捨藏決するなど申されたれば四十年一度もつくらすされ共今は閑暇のこと故に戯にする也不文勿論也

聖謨頓首謹復某足下。日辱下問。以英夷窺覲之事再三。而山國冗散之衝亦有所加。俗事紛擾。復書遲緩。請海涵焉。抑西戎窺覲之機。既久矣。僕在寺社奉行之衝下。查箱館之民。通商於西戎獄。又所友。渡邊昇。間宮林藏。常論西戎之事。不止。故得聞大要。而後大久保加賀守某爲首相時。以錯聞擢爲御勘定吟味役。而預知西洋海船之事。唱浦、懸由之昇林藏之徒。日多來論駁焉。頃之相公卒。無人島之獄起。昇之徒被罪者衆。僕幸免。而後數年屢移職。時非不論西戎之事。皆答執政之問耳。而昔歲移此地。其職雖管山外州四十九万石地。萬山四

文見三本橋
ニテ帆の多
クカケタル
この舟のよ
るてふこと
を夢の問も
わすれぬは
よの寶也け
觸饑晴川院
筆文天詳詩
鐫一乘齊詩

遼西洋海船之事。棄爲高閣上物。數年焉。唯讀書馳馬。或弄風月。消閑而已。頃來
仄聞英夷屢來浦賀。懷昇之徒。陷身於刑辟。有所言寤。寐患國家之患。飲食亦
不爲。而非其職。漫論古人之所戒。是僕所以不答於再三問也。足下幸休怪焉。然
朋友之義。敢一言。僕昔製臨戰陣刀。今猶存馬。裝櫛鑄以松平樂翁老公題。西洋船
國詩。其意云。慮西洋舶來夢寐之間。不可忘。僕服老公。早言其事。採之。廟堂之策。豈
莫在其中乎。副刀之小刀。靶鑄以嚮。體與宋文信國公詩。其詩曰。唯以丹心照汗
青。夫信國公之事。昇平之世。如無所用。而至誠事君。誰不尊之。僕聞。至誠生至明。
以足下之才。以至誠籌之。虜之情。如開明鏡。照妍媸。奇策乍成。天下永受其賜矣。
即圖附別紙。唯足下擇焉。

かく記したれと遣はさゝりける。是にあらは眞面目なし。一向に役にたゝす。○
身延の開帳三千兩あまり候。由新右衛門の嚴敷によりしなるへし。日蓮に利
益あるならば。新右衛門の第一に利益を與ふるなるへし。○新右衛門は用途
金熊野三山を恐るゝといふこと。尤至極也。夫にて少々安心したり。可恐のか

きり也。序に云過日熊野社家惣代玉置縫殿義我。機嫌聞に參る積之。處道中を
急ぐ故にとて。縞縮緬二反。紀州之御家來森下孫兵衛持參したり。よつていふ
今役は。かはりたれと以前よりして。出家社人百姓等之ものは。不及申諸家之
家來之もの一度も。もらひたることなし。既に例之。塩路新次郎と十年余も突
合たれと一文のものにて。も貰ひしことなし。是は。新次郎證人也。今般孫兵衛
の對し申すに。あらずとて。歸したり。同人甚敷こまりて。みな一位殿之御手當
にて。縫殿は。表向之事也。既に今般も。縫殿へ五百兩外。社家の三百兩御手當。被
下所々の被遣物之反物。其外長もち。五棹あり。此反物も。其内なりしか。申上か
た。不宜恐入たる也。いつれ御國に可申遣とて。如鼠になりて。歸りたり。新右衛
門の心得方あるへし。少も油斷すへからず。尤可恐事也。其時は。なしに。聞にい
るゝの。ことを。水野土佐守いふは。寺社奉行所を申上になりたるものか。或
は。土佐守考か。寺社奉行所にて。も知らぬことを。御老中を御達に。相成様にて
は。新右衛門など。紀州の懸りは。斷もの也。よく御心得あるへし。甚不安心也。○

海丹忝候書狀到來之日に與力共の居間にて酒給させ候處夜五時頃に相成書狀到來別條なしとの事故に夫に不拘居間に居て末つかたに退坐してかのうにを聞らき大根おろしのうちへ加へ給たるに味至るよろし夫にて奥の居間にて酒三ツを又給たり其頃は與力共も歸りたれば則別昏の詩を認申候懸御目候御論承りたく候これは楠の詩に御座候武士はこれにてことたるへきかに候いかゝ書躰其外とも承り度且過酒なといたし不申候證據御覽可被下候いにしへの聖賢飲食男女をもて節要として夫より工夫をしたるといふことをこのほとわか學文に御座候其しるし懸御目たくと酒後一枚まゐらせ候○菊のこと御うらやましく候其ことにいたりては落涙の外可申義無之候いつか母上并新右衛門らと酒くみかはし可申哉兄弟はまだまだ二十年余のこと也母上に早く御目にかゝりたし○鐘三郎養子相談之義聊存意無之候夫はわか子供より身上まで任せ切候新右衛門にて寺社奉行所にて御用向を新右衛門へまかせ切候人也其人のよしとおもふこと必

よかるへしわれ少も存意無之候さて夫は別事也わかおもふことをしるすよく御取捨あるへし○其人何故に持參金を望候哉三百俵のたゞの養子には高過はいたし不申候哉何故に持參をのそみ候哉御糺候而相分り候哉○三百俵の御小納戸ならば御小性其外より縁談申込多可有之候何故御取立ものゝ我らことくなるものと縁談いたし候哉○養祖父の年齢五十前後に候は、御勘辨ものか年齢書狀に不相見候五十前後と申候は、必四十三四歟いつれ新右衛門位に可有之候○養父の娘に配偶いたし候由に候得は當主も三十四五より當年四十位までの人に可有之候年若にて何故養子いたし候哉其糺不相見候○當人の親類縁者其外之義は聞糺候は、よく可相分候相談之決着以前に可相分候此こと得と御糺ものそためにてはよろしからず候○鋳作を遣し候節は内々寺社奉行所之内探り方之同心の世話にて風聞たゝしいたし申候夫は万一之義有之候節は申譯無之故に候○三島の文通にては取極には不相成候わくるは不申わけに御座候○鐘三郎事万

々一不縁に相成候節は十年之間は養子に被參不申候こゝの所大切に御座候○養子のことわか父上などは早合點に被爲入候るこまり候義御座候御同前に當時のことくなるはコボレ幸ひと御承知可被成候このこと甚以不容易候くらやくの借金など直に可相分候これは御藏手代又は内さくりかたにて可相分候御藏手代はいくとも組頭衆弓之御突合之内に可有之候以上之義を御穿鑿に少も心さはり無之候得は十分に候幸三郎縁談之節風聞糺不宜候る追而相分り候誰もわろく申候人は無之候其頃母上にも申上候知らぬ人との縁組よしときゝたるは實事に候とも其外きかぬ事しらぬ事は皆よからぬ事に御座候知ル人の縁組よからぬと此方にかそへ上ケ候外の事はみなよき事に御座候もらひ候と違ひやりかたは十年の日かけ物に相成候間其節後悔いたし候るもいたし方無之候久須美の次男よき人にも不運にて日かけ物に一生涯終り申候養子のこととは不穿鑿の事有之候は、可憐大切の子に追而苦勞をかけなかせ候事多御座候是等之義我は

よく相辨居候よく御勘辨之上得と十二分にも十五分にも御穿鑿可被成候遣し候る跡にてはいたし方無之候聞しよりよく候得は子も居附申候いやと申候得は叱り候義も出来申候夫か相違いたし候得は子をカハイクおもひ候る却る熱湯を吞ませ子も口外ならず親もくやしういたし方無之か世間に問々有之候よく御勘辨可被成候一躰は存寄無之候得共心附候義を不申遣候るは不實に付相しるし候御簾本は御簾本同士のふることく降如によき縁は有之候夫を御取立ものと縁をくみ可申と申候はよく御穿鑿之上被遣候方と存候鐘三郎不便に存新右衛門を大事におもひ候まゝことごとくにするし候容易に御覽あるましく候あつき涙の出候とき子は可憐ものに御座候新右衛門は其苦勞不存候間とくとしるし候○幸三郎書狀之内太郎事彰常のことくにおもひ候は、宜ケ間敷と申候義相見候定る左もあるへし何卒太郎義を不便におもひ候人有之候は、打より候るアタマを打つゝけにうち候る惣身になま疵絶不申候様なし可被下候よつて別昏にし

るし候而差遣申候右はいつくへか御はり出し置可被下候元來は慈母等之手をはなれ居候間此節一生をよくいたし候種に候處母上の御あはれみ新右衛門夫婦の御あはれみにてあまへ候事と相見候これも無余義とも難有とも可申候得共乍去いかにも嚴敷いたし不申候而は不相成候同し位の人にては嚴敷いたし候ほとしをとよりよく相成候あまやかし云芽ウメのふきたる子幸にあしくなり不申候とも天より賜はりたるを全にみかき出し候事かたく候

○十三日 晴 與力共ハ酒爲給而帶地一筋ツ、遣す○與力共に酒のまぬものなしこゝの與力共は奉行を主人の通にする也脇差を與と表の間にとり出る也其余右に准す

○十四日 曇 中院屋ハ拜禮として參るこのほと例之通早く起て刀鎗をなしみるに夏と違ひて冬はいつも別而こゝろよし力ますかことし不思議なるものもおさとは霜かふれは大に恐れわれは霜かふれは大によるこふ

人々ことなるもの也來月はとても出來す一兩日のうちに庭の月みをすへしといへはみなく恐るゝ也我いふ後赤壁は十月也十月ふねにて月みをする例あれは庭にて焚火しなから月をみる何のこととあらしといふ也

○十五日 曇 月並之禮受ること例の如し○一昨日久須美へ見舞の使出す○十二日には母上の御例によりて例之日蓮の會式いたすおさと女と菜園のいも人參なととりて江戸の通りいたす菜園ありて精進物にて買たるは豆腐なと位のことなるへし人參出來けしからす長サは六七寸より七八寸位なれ共大成は差わたし三寸五六分あり江戸の大根よりふとし味至るよし○かうろき猶なく氷なし

○十六日 晴 昨夜は月よし月前のもみちをみむとて庭へ五時頃より出て遊ひたり所々の落葉なと中間にかきあつめさせしに夥あり夫ハ火を附たるに一二間はかりそばへはよられぬほとあつし霜のふるをも覺へすおさと市三郎等と四過まで庭に遊ひ居たり夫ハ馬場なと歩行て深夜にふ

せりたりならに居るはこれはかりよし火事ならぬといふもの故火のこと
至るゆるやか也市中に千年以上不焚^{マダ}てらはいくらもあり○昨夜は輿に乗
して北の方にある馬場へ行て畑にある大根をみつかから拔夫を西北の隅に
あるいなりに行たるに藪のうちより鹿出て大に驚たり

○十七日 晴 昔石川左近將監のかたへ行たるとき時節はいたし方も無
之と申たればよき御役人になる積なれば時節とはいはぬものそといひき
書經の天功をたすくるといふ意とみえたりこの人腹より出たる説也山陽
か唐の裴度といふ人を論して天下の人にあればといひておもはるゝ人は
天下中の責を引受天下の權をたもつものは天下の恤を患ふといひたり確
論也○ならにて輿力のわるきことあればみなわかとか也夫をおし廣めて
いへは役人にあしきこと可歎ことあれば執政のとかとも可申也人選其外
のことみな執政の任にて外人の手出しのならぬこと也其内人選執政の第
一のこと也いにしへ夫等之事を人に自由にさるゝ人愚か弱きか奸人にて

職をのみ大事にして躰をつくり居る人也歴史をよみても夫に目かつくと
よく時勢のわかる也其とかみな執政に歸すること也しかるをしらすして
執政の甘き辭になつむと飛た目に逢也買充か成濟を殺して申譯をなし夫
より上は景帝か鼂錯を殺して吳楚七國へ申わけをしたる類也可恐のかき
り也かゝることをする人多く柔弱の人にあること也新右衛門など御用透
に歴史を讀ならばこゝろしてみるへし

○十八日 くもり 十四日に記すべきことを忘れたり同日夜にいたりて宅
狀來る○四郎か家内日割通歸府いたしたるよし先以安心也さて母上様は
内藤へ被爲入候由御機嫌克御事恐悅其外之御無事目出度候○近藤遠江守
參り候由右之人は新右衛門之元頭頼母といふ人の内實は子也新右衛門之
縁に頼母いろ／＼申候遠江守飯田町九段坂の屋敷を新見に被下候節
御貸附之世話など申たり矢部と申談世話いたし遣夫を縁にて今にきたる
也新右衛門は丁寧別段にする由尤也先之困りに不拘いにしへをおもひ禮

をつくすへしされはとて次之間に手をつきものをいふにも不及深切にして丁寧にすへき事也新右衛門を取計日記を躰よろし○浄土宗の地獄極樂のおとりを具のことめつらし右は先年太田攝津守殿懸りに奥澤村九品佛に廿五菩薩來迎會といふことありて夫にやゝ似たることをさし留たることありき其頃増上寺などより申立を品も有之と覺たりしかるに後に通鑑をみるに六朝のころより追々みゆること也いにしへ日本にも多用ひしとみえ東大寺などに佛具のうちいろ／＼の面あり其のどりなるへし六朝又は唐の頃などは宮女のかふりて踊しかと覺たり○菊見によくこそ豊藤を御呼被成たり御馳走を獻立等承候とり／＼よろし○豊藤より樂翁殿をかけものくれられ候由氣のとく也○不二孝のこといさゝか心附なしなるの品も此ほど進達を積也不二孝のこと決而不止ます／＼さかりになるへし後年を害をも品に寄なすへし此節を不二孝は理學にて至おもしろきことにて根本は易或は王陽明などのときことの泰山の丘垤河海行潦

にて富士とけしツブほどの相違なれと味ある故に止へからすとおもふ也これにつき説ありとても云ても不被行事故捨置也○新右衛門落馬のうち身再發を由可怪事也うち身の再發といふことはなき事也必病ひ也其譯は元來腹にこりありて筋へ引はる也夫故に筋のめぐりあしゝよつて以前うちたるところ全に治さぬ也うちたるか病ひの力をかりて害をなす也老後に及びて可恐事也我右を大指を十六歳の時くじきて新右衛門知る通三十はかりの時劔術にて大にこまりてなくらに見もらひたるにくじきは聊也癩症故にかくのこととして服藥を教へてもみくれたり正しくうちたるに無相違をかくいふは不審さよと内心大に笑たるに此ほとになりてなくらの尤なることを得としれりうち身などの類却治するときは木のつきほのこととしを経て再び起ることなししかるに病あるによりて其筋骨の血のめぐり不宜夫故に上直りをなし居る也決而疑ふへからす針のことをしる按摩をよひ疝經をもみもらふへし必疝經の筋いたむへしこれたしか

成こと也むし齒なといふものも腹のこりの筋よりして其邊の氣血不めぐりに成て口熱にてくちくさるゝ也これらはわかゝらたにてたしかにためしたり此ほとは家來の顔を一見して汝けふは左に病ひあり右に病ひありとてためしみるに多くあたる也みな筋のふとくなる故にしるゝこと也新右衛門など必大きい湯に桂枝苓等附湯を日々一ふくつゝ三十日のみて其後にはらの筋をよくためしみるへし我日々にためし按摩にもませてみな證據あること也決あやすくと聞て等閑に成へからすからだあしくては御奉公のならぬ也其うち身中酒并女あしゝ湯尤あしゝ心すへし長湯大どく也これらのことなくらにて教もらひためしてとくとしりたりなくらはもみみて昨夜の房事を知る也あさむくことならぬ也それらはよくためせはしるゝこと也

○十九日 くもり 此ほと氣分よほとよし尤常々四月五月は病ありて十一月前後は健也けさはためしに壹貫目はかり之居合刀にあ一かたに受ふ

り二千本いたしたれ共少しもくたひれす手などへこらぬ也日記は即これを其手にてしるす也顛フルさるにてしるへし其外やりのすこき等は別に例を通にしたる也これにては當分氣遣なきかことし乍去病氣は常に快とききさししくじりは勢盛なるときにめくめりこゝか大切に養生すへきところとおもふ也○市三郎の鍵少々覺て寶藏院などをつゝけに遣ふなれと我と遣ふと息きれてへこゝになる也乍去わか息は少もきれぬ也母上御安心可被下候よつて記之

○廿日 晴 此ほと過暖也朝五時に五十八度以上也當年の夏の冷氣によるものか乍去此躰にて十二月に雪なくは五月までは米五十兩以上なるへし○此頃ある人のふみ書たるに旅の贈り物に井けたをおくりたるといふことありいかなることにや新右衛門の紋所也しるやいかに一寸おもひ出てす候合類節用といふ俗書に幹この字に井けたとかなせり乍去幹の字は元來木又は草の莖クキといふ字なれば易にも貞は事の幹也とありて朱子の語

醜は酒をいふか
もすとも雪か
りて寒類しい
とてふ多し
莊子も其し
莊子も其し
いなるも
莊子も其し
め子も其し
ありおのれ
か心もとい
ふ心もとい
つ篇に鳥を
のへし昆魚
鯤あり昆魚
昆魚あり昆
く字也つれ
く字也つれ
も文章の全
た文章の全
遣ひたるに
は井の字に

類に垣を築立る眞ほうの木のことしとかありしと覺たり幹は都々物事に
主として重立取計の意也父の蠱を幹すといふことも易にあり以上は去聲
の時也さて平聲にのみて莊子に井のうちの蛙のところは井幹の字あり是
はいかさまにもいけた也いけたといふもの井に主たるもの故なるへし乍
去井といふ字を加へて用をなす也夫を字引に幹は井欄也といふより節用
に幹一字を井けたとよみしなるへし字書に四角又は八角なるものといへ
は今のいけた也一字にて井けたといふ訓いかあるへきさて又幹に杖の
義ありそれは周禮の考工記に罪人を打しもとは荆の幹をもてつくるとい
ふ孟子にも杖をつくりて秦楚の堅甲をうつとよむ杖なるへし夫より幹は
杖にて和訓いけたなといふひかよみを歌のはし書にせしやいけたといふ
ものを旅のはな向にすることを聞かすと答たり以上は龍介か歌よむ友に
聞かれてこまりていろくしらへたるをわれか譯せし也もとより出まか
せ也夫によりておもふに陣中の井樓をくむといふも井けたの如きものを

組て高くする也蒸物の井樓も夫より出たる名なるへし文選にも井欄の高
きにのほりて目かまはることく覺しなと其外樓のこときものあれば夫は
相違あるましケダは方の義にてこれ井上の紋の井けた也今も風流なる井
戸にはあり夫によりておもへは井のふちへ木を井になしたるかかけたの
はしまりなるへし夫は井の字跡にてもしるへし又井筒とよむ人もありこ
れは筒といふ字によれば今のいとかはのこときもの出來しのちのことな
るへし乍去岩井つゝ板井つゝつゝいづゝか伊せものなといひて歌には井け
たとはいはねは和訓に井戸かはをいふ時はいづゝといひて可なるかこと
しされとも源氏のいよの湯けたなどの例もあり四角なるものを方^{ケダ}とはい
はれぬ故に紋所にいふときは井桁^{ケダ}といふ方か
○廿一日 雨 去ル十九日に細川の家來高野結城藤堂和泉守家來佐々時
之助其外兩三輩寶藏院へ仕合に來る市三郎をも呼に來るわれ市三郎にい
ふ汝か藝中々他流試合なとすへき藝にあらず乍去先生をくり出しならば

遣ふへしわるひれ尻込すへからすさてはしめの一本限也あとはまけてもよし遣はゞかまやりよしはしめに場をみて遣ふへし立上りたらはめをねふりてもよし飛込へし手もとにて勝負せよと申付遣したり市三郎はしめに時之助と遣ひたりかまをもちたらは其人長刀遣ひたるかすやりをとりしと也巧者なる人故に大に場をもち出して鍵をすへたりければ場かつまり候少々御引被下とて場の釣合をつけたり扱立合になり鍵もちて仕かけ來りし時わきを向て居たる故に先之人引たり引を相圖に立合てとひ込たる故に先の人驚てやりをつき出したる故にやり下りてもへあたりかまやりは面へあたりたる故に市三郎勝になりたり次も又しかりあとはまけしと也先の人^はなかく市三郎の類にあらすみな上手也我いふ先にてやりを落したらは突へからすかまやりを莖短にもちてよせ膝頭の邊をつくへしと申付遣したり果してやりを落たる^ときに前のことくに構へて行たらは先の人まいりたりといひしと也相弟子のうち^に同じことありて面を

つきかけて手つかみにされしと也前の立合の仕かたは酒井先生われへ他所のものと遣ふときの傳授を教へし也はしめに弱々と場にのそみて竹刀をとると飛込て逆の小手へうち込といふことを先生の常に仰られしかよくおもへは孫子のはしめは娘のことくにしてかゝるときは兎のあみを脱て飛出したるかことくすへしといひしと一理也孫子に兵は拙速を貴ふことよく神速といへと孫子には拙速とあり下の巧といふ字に對し甚おもしろし巧にして遅きことをきかすとあると符合する也酒井先生は上手なる人也おしき人短命也當年五十八位の御人なるへきを四十六にて失給ひし也

○廿二日 曇 去る廿日には兼而寶藏院より與力共槍術出精の躰みせ度に付いつ方は歎參り候序立寄の格にて廿日には出席いたし吳候様と之義に付略供に參る寶藏院は興福寺の地中なれと構ひの外也直に稽古場の門より參る稽古場の門といへと瓦やねひらき門にて立派なること也門内に與力共稽古として參るもの共立出て平服せり寶藏院の後見滿田權平と

いふもの案内いたす寶藏院は白き衣に紫のさしこをはき大脇差をさして
稽古場の上り口に出迎たり稽古場は瓦ふきはいふもさら也立派なること
目を驚せり三間に七間のから板にて柱六寸角にて板式はひのきふしなし
にて釘を表へうたす六尺六寸間也すきめもなく全に能舞臺のことし稽古場のはめへ竹
すたれのこくとくにやりをかけたるに二尺もあまれるに其高サを思ふへし
見物所は床附八疊にて次之間もひろしうしろは通し椽也御門主御覽のと
きのためのよしみすをかくるまうけありてみな高麗べり也圓なる額をか
けたり字は唯心藏とあり朝鮮人の筆也稽古場の隅に宕愛の將軍地藏并春
日の赤童子といふものを勸請して元祖胤榮の像ありこの所も八疊はかり
にてごう天井也わか坐は毛氈を敷金屏風立あり次之間はわか召連たる給
人近習并今日召連参り候老分の與力共三人かた衣にて着坐せり稽古場に
いる側附にて其いるかはの末にのれむをかけありそこに稽古する人々は
溜り居てしたくする躰なれとみえすけふは織田の家來六人種田并無邊流

地藏前に月
顯堂とあり
胤憲自筆

のもの仕合として來る與力之内四人同心二人遣ひたりはしめは寶藏院遣
ひたりころもの袖を首へかふればたすきに不及して奇也さしこを着たれ
は別に袴なしこのさしこといふものを奈良の出家はみなはく也御門主は
紫の御柳に白き織出しあるもの也さし貫の裾をきりたるもの也御門主な
と御酒にても被召上或は御樂のときころもを御免ありてもみなさしこを
着用して居る故に至るよき也關東にてはなせせぬことにや扱寶藏院表う
ら并鎌の術丸髻を遣ひたり夫より仕合をもみなくしたり市三郎も遣ひ
たり末に市三郎と寶藏院と遣ひたり其時は院主も並々稽古着にて遣ひた
り市三郎のかた少々よし先ッ似たるもの也寶藏院の後見并家來共二人み
な遣ひし也後見はか也に遣ふ也家來二人は市三郎位のもの也寶藏院はわ
か槍術の家本なれば院主の遣ふうちはわれ毛氈より下りて見居たり畢
酒など出る一わたりにのみて院主よりわか方盃をもらひたり院主いた
く恐入よしふ故に左にあらずわれに戰場のこと教る人の家本なれば豈

不敬乎とて強^クもら^ハるたり元來茶はかりの約束故に院主へ二百疋と干鯛のとき箱へ入たる葉たはこ後見へ百疋遣したれと寶藏院はよほとの入用なるへし寶藏院は鍵の遣ひ口いづれもたるしかたはいにしへの躰なく今の江戸風もおもふに清水次郎か風うつりしなるへし四年之間御用^ニ外にては御門主へ被召るゝ外今日初^ニ私事にて外出したり其外には春日の藤東大寺のさくらなどをいまにみしことなし眉間寺は聖武帝の御陵ありて坐敷みかさやまの月をみるに奈良第一の地なれば虫を聞なから行へしといひなからはつかに六七町の所なれと今に行たることなし醫師の抱やしきへ松たけかりに代々の奉行みな行とて當年も段々と願ひたれと行かぬ也

○廿三日 くもり 此ほとけしからす暖氣也朝五十七度也けしからぬこと故これにてつゝかは來年大ことなるへし乍去われおもふに夏の返しなるへければ寒にいたりてさむくなるへし○けさ正七ツ出立にてたむけ山

を過いつみ川を越て宇治のさと大池を経て伏見^{フクミ}にいたり宇治川をわた^リり桃山道^ヲをこのもゝ山といふは大閣殿下の御城にて鳥井彦右衛門打死せし御城あと也今は畑となりて桃多く植あり故にもゝ山といふ也^夫いなり山のうちを通り大佛前にて小休いたし用達大宮通みいけあかる所若狭屋八兵衛方の八半時過に着したりなら^ハ京迄十里といへ共近し

○廿四日 くもり のしめ麻上下にて^コし明也所司代^ハ參る用人宮田安左衛門を以關東^ニ恐悅として罷出候旨申上候處其旨可申上と^ニ事也所司代は六七日以前^ハ御風邪にて少々御下血^ニ氣味にて御引御逢なし伴金左衛門は疝積にて四五日引今日^ハ引込になりしと^ニ事也所司代近來御病身^ニ由左もあるへし四年已來上京^ニ度々いづも^ノ十日はかり或は廿日位の御引^ニ所^ニ參る也こまりたること也京都にては近々西丸御老中^ニ御用召と^ニ由風聞する也○きのふふしみのもゝ山にて

君のためそゝく血しほはもゝやまにみ千とせかけて名をとゝむらむ

も、山の玉の御殿跡絶て枯る、尾はなにこからしそふく
ふしみの大池といふはいにしへの巨くらの湖なるへし大閣殿下のころは
淀川水行よろし故に大池になりけるか段々水逆行して今はさしわたし一
里余と成たり

よと川の末うつもれて田の面を大くらの江にかへす白波
ならばしくれないうたによむさまは京都のこと也

ことのはのさまはかくとそ夕しくれはれくもりするみやこちの空
からうたの鶏の聲橋の霜けにもとおもふ旅衣かな

なら人はおとろかれけりしくれして八幡の山にかゝる村雲

○廿五日 かこの中に京都へ参りたることを

霜曉桃川渡。未昏到帝京。烟霞十里隔。寒澗一層勅。慣閑麋鹿街。罕看鳳凰城。
拭眼紅裙艶。飛魂紫陌彭。屐鞋徹宵過。鼓折報更明。驛寓商閭隘。愁眠客枕驚。
隣春牀壁顫。乘馬戶庭鳴。如何旅中旅。辛苦守孤檠。

この意は霜のあかつきにいつみ川をわたりて日のくれぬうちに京都まで
参りたかはつか十里のけふりかすみの隔なれとさむさは一段と勅ヒッこ
とてさて又さひしき鹿のいる御役所からたま〜鳳凰のやうな御城へき
てみれば眼をぬくつてみる様なあかき裾の女ともか居るし肝をけす様な
町々のさかむなことしや夫故に夜通し下駄や草りてあるくおとかするし
拍子木や御太鼓て夜の刻限もよくわかるたびのやとりは町やてせまくう
きたひのねふりてまくらもおちつかぬ事て隣て米をつく音てゆかやかへ
までふるへるしつれて来た馬ははなのさきてなくなりとをしたものちや
そあゝ旅の中てまた旅をして辛苦いたしてさひしひあんとくひ引を
して居ることてこさる母上のためにこれをよみて御聞にいるへし自分の
詩の國字解はめつらしきことなるへし

○廿六日 はれ 三十六度のさむさ也乍去氷はなし○廿四日には所司代
は参り旅宿に歸りたるに神尾安太郎甲冑其外大小小道具などをもち來り

て九ツ半時より夕くれまでいろくのはなしをなして京都のさまなど詳に聞たりこの人十四年京都に居るといふ也夜食畢ると西村藤藏來るこれは唐本位は自由によむ才力ある五十七八はかりの男也同心にて別段之譯にて筆下なれと肩衣着用するもの也これも又刀或は甲冑をもち來りて京都のさまなどいろくはなす也これは酒のむ人なれば酒などを出し歴史より易のことなどはなして夜九ツ半時過まで居たり夫かはなしに大日如來の開帳とやらむ來りて豪家のもの日參のことし奉納もの金銀を費すこと夥し其内に奇なるはあまりの事にて狂言かつら數十人前をつくりて奉納をなしたるに大に入用かゝりたることなれと奉納されたる人もこまりたるよし夫にて其繁昌をしるへし佛に諂誩するさま筆につくされす腹をかゝゆることあり○今日は京都より伏見まで肩輿にのり夫より歩行をして木津まで歩行したり曾而歩行せねは大につかれたり京都より十二里也其内ふしみまで三里木津よりならまで五十町也其余は八里に及ふへし重

き大小をさしてたちつけをはきて急歩行せし故か大にくたひれて残念也われ大成やりを遣ひ太刀ふりて公儀万一の御用の爲とおもひ居るにはつかに八里はかりにてくたひれては甲冑も武術の役なしこれ十六年はかりかこのみのもる故也よつて以後は槍其外を減して馬場を多く歩行てならすへしとおもふ也○京都を夜の引あけにめしを給出立してならへ歸りたるに日いまたくれす十里はかりに近しとのみおもひ居しにしらへみれば十二里余也乍去平坦の地にて歩行よしとみえたり

○廿七日 くもり朝四十度 昨日起出てみるに草臥全にのきたり乍去めつらしくよく寐て五ツ頃々よあけまで一ね入也よつて鑓は遣はす乍去このくらゐにてはまだくからたよしとおもひてますくはけむつもり也○藤藏といろくの話の内に來山陽の文をみるに日本未曾有の文人也書もよしとおもひてならにて所々の所藏をみるに書今一段よかるへし贗物のみ也とおもふといひしに山陽をいたくそしりて乍去一二幅は無紛正眞を

もてりかれこときものも御前のことき才を愛し給御人あれは卓爾たる御眼もくらみ候なるへし即この一ふくを奉るへしといひてくれたりなる程にせにあらねとも書に氣韻なしこれ山陽の人に議せらるゝ所あるところとみゆますゝおもふは手習の師といふ米庵か類のとるにたらさることたとひかなりに出來ても人まねするにて狂言の類也近來の能書は栗山なるへし栗山のよき書はとゝへ置てみるともかなりつゝきて精里なるへしかなは樂翁殿の六十前後の御時さては千蔭なるへし眞淵の書は儒者のこときものにて一風ありて絶倫也古躰の祖となるもけにとおもふ也宣長の書はもゝ瀬流にて是もいやしき氣分ふてにあらはれたりみつから罪人たとしりなから悪事をいひちらし前後不都合なることをいふ丈の所なるへし吳くも手習をして書をよくかゝるゝとはおもふへからぬ事也○今夜並便相届く

○廿八日 晴 母上様倍御機嫌克恐悦之至其外之御無事目出度候○過人

出來候由實事に候哉可疑候○鐘三郎事再應之御勤にて御相談御取極之由逐々申遣候趣も候得共乍去彌よろしき事に候はゝ此上も無之義と大悦に候○おのふ宿下りいたし候由又々いろゝ世話に相成候事と歎息候○貞五郎書物方に相成候由右之趣は大越よりも申來り候而新右衛門の厚申通候様と之事也ふみの長サ一尋はかり文略○新右衛門事多之由左もあるへし小學の教の清緩勤この三ツ一もつゆの間もわするへからぬこと也わか兄弟清も勤もか成に出來るなれとよく緩なること不能緩は急の反也いそくと仕損し多し此ほと新右衛門に脇より申ものなし仕損をすると獨ころひ也御用多ほと緩にすへき事也緩は手をあけて遊ひ居ることにあらず緩大のこゝろにてこゝろザハくとして火事場のことく或はこのことをするうちはや次之事を思ふの類也こゝろに斷絶あるは怠也たとへは繩を引切不申やうに張かことき味也我等之修行のうち第一の六ヶ敷事也○母上様御書難有拜見御機嫌克御様子恐悦之御事○新家娘之事御尤に御座候いづれ

とも相談可仕候○龍の口之病人もよろしく候目出度候○さくらの菓子被食上候御意に叶候由難有候○人は用らるゝ事無之ひだり前になり候時にこゝろをよく養ひて行跡をよくせねはならぬ也君子と小人順境に居てさして不違様なれと逆境に居て天地をへたつる也世中にいれの起りてたとへは家來は不正をなし勝手は商人にたのみて大無盡いくらもいたし其身は酒色にふけりて女くるい長夜の飲酒にふけり夜は八ツ七ツにて朝は必四ツ位に起き表に出ることなく夫故にからだも評判もわるくして其上癩積にて家來のみ叱りちらすなとゝいふやうなることはあるまじきこと也かゝる人勢を得れば強満早くして大變を仕出す也松平伊賀守殿などの御引込中つゝしみの別段なること世に稱すること也伊賀守殿などいかなる逆境に居ても動かぬ人とみえたり御老中にてよき御人天下の御爲にならせらるゝなるへし新右衛門など一旦御支配受し御人也こゝろして疎遠あるましく候

○廿九日 晴 霜つよし三十八度也泉水はいまた氷らす○與力共同心共みな麻上下にて御縁組之恐悦を申出これは廿八日るこれわせたの一役の例のことし○今朝これは廿九日三十五度之さむさ也泉も氷る○昨夜吉藏來るよし民藏申聞る昨夜中三之間の板敷を人いくたひもあるく音したる故に心配せしに右を承り安心せり

○晦日 晴 母上様御機嫌克と之御事に御文拜見何より之御事御手蹟も御健なる躰別之御事○おのふも下り候御逢被下候由新右衛門白ちりめんなどくれたるとの事いろゝ世話之上の世話と存候義に御座候○鐘三郎之縁談いろゝと案事候處今便之様子にては大堀出しものにも何よりは養父もかたく其上甲府を被召返候位之人に候は必よろしかると被存殊には御番入之もくろみも有之候由首尾能御番入いたし候得は居附も宜と別之存候義に有之かゝる機會遠國相談にては參り不申文通に御は余意不相分案事過し候事而已也此外にもかゝる事多可有之候くれゝも

不申越候亦決着いたし不申候亦は不相成候これにても遠國はいたし方無
之候機會は一時を争候ものに有之然ルを百里之往來なか／＼参り不申候
○くすりのことアンラカ之義早速申付たれと無覺束事也井之場讚岐とい
ふは勝南院宮内か師にて大和にはめつらしき名醫也此人かく症にて六ヶ
敷かりし也よつて稗まの粥壹合ツ、給て世の交をたちて此ほとまで無恙勿
論今以養生は已前のことく也と聞かくの病心配と美食至るとく也とて讚
岐はかく療治をすといへは御奉公人などのならぬこと也アンラカとかい
ふくすりを用ひしことを聞かす實によければ薬店にあるはず也○雷電剛
雨夏雨のことし

○十一月朔日 曇 右之薬いろ／＼しらへみたるにならにアンラクハと
いふ痰咳のくすりあり所々にもあれと和州之内にては多武峯名産也とい
ふことわかりたりアンラクハといふものは和漢三才圖會山果類に菴羅果

てんぢくなし 此種未有於此とありて本草綱目を引て菴羅果出西域梨及柰之
アンロクコウ 類也とありよつておもへは天然の果なるをいにしへ御取寄になりしもの
なるへし與方らか宅にもあり多くは實のならぬもの也早速に即刻多武峯
へ所望に遣したり○今日吉藏出立也書狀と少々相違あり書狀之方よろし
○二日 晴 新右衛門之書狀にはアンラカといふ草とありて大和國いつ
れの地より出るといふをしるさすよつていろ／＼聞に醫師もしらすとい
ふきくすりやもしらすと云前の菴羅菓は山果にて木實なれ共先夫を遣す
積と決したり乍去大和にあるものは味澁く苦して小兒もたべす本草にい
ふ所と大にことなり西域のものなれば味變して薏苳仁日本へ來りて珠數
玉となる類其外同しことなから大黃厚朴なといたく効をことにするの類
にあらずや至るうまきものにして多食するとも無害なとあれと大和のも
のは半口も食ふへからす必効あるへしとはおもはれぬこと也眞の菴羅菓
は江戸の薬やにあるへし世にかゝること多し可歎○おのふ女故にわさわ

さ飛脚を越したれと日傭多くかゝるへし其入用に而道中三日きりを出せは半金に而今頃は途中半に返事の状あるへし書面々様子にてはしらねとも吉藏はなしにてはおのふの薬用のことくいふ故にことの外いろくとおもへとも新右衛門の書状おのふの自書によりて心は夫に定たり

○三日 晴 きのふ易の豊の卦の彖傳をよみて日中則昃。月盈則食。天地盈虚。與時消息。而況於人乎。況於鬼神乎。といふにいたりて再ひ三たび歎息したり世の中のことかくことくならぬことはなし盛なり目出度といふかきりの時にいろくよからぬことをみな生ずる也其躰夏のさかりの只中に夏至の衰をきさし冬のおとろへのたゝなかに一陽來復する也このこと人はさら也鬼神といへともまぬかるゝことを得ざる也され共易君子のためにまうけて小人のためになうけす易陽をたすけて陰をおさへゆる事聖人の教なれば静にして其理に向ひ行て求めすさけす春夏秋冬衣服のあらたまるかことくなし行かねはならぬ也われ大に感ずることありて記す也こ

の意中は筆にしるされす銘々の身に引受てしることも也乍去衣食を貯て早く穴へ引こむ蟻の躰をみても勢ひはしくしるのはしめ人によくいはるゝはわるくいはるゝのたね也とおもへはうつかりとして土用ぬのこにて寒かたひらの患は少々まぬかるへしこのこといとかたしあゝいとかたし

○四日 晴 けふ市三郎にいふ世の中に親か苦をする子か樂をする孫か乞食すといふことあり川柳に

賣店とから様で書三代目

ともあり御奉公其外々苦勞をする故に暮しもケ成にて兩番小十人々並高之人とは莫太々違ひ也夫をしらす若とのさまにて育られて愚になり居故に是非にしらみを拾ふ次第に至る也われなと三千石ほどの取ものあり夫にて今のくらし也夫を三百俵に引附てみると平日みそなどをなめ居りて奢のかきり也其譯を露しらす親も氣か奢りてものを貯子孫の馬鹿にするたねをつくりたかる也大笑也とて歎息したり乍去慶安の御軍令たけの武

器はわたしてあとと親かみなうり拂て貧人の存命中くれ遣したらは品に寄りたもよかるへきか五兩の金をもし人にやれば高慢の氣になる也其かねは子孫へのこすと一夜に遣はれて仕舞こと也御役にあるものこゝろすへき事也大夫は七十にして政をいたすといへは吾なと其としにならば必かくすへしとおもふ也

○五日 晴 三十八度のさむさ也池に薄氷あり米百匁と成○孫子によるときは士は五里のみちを歩行て甲冑を重くおもはぬ様ならては少も役にたゝすしかるにわれ七里はかりの道を歩行たらは更に足きかぬかことし平日やりのすこき其外のこと凡一時ツ、は日々必かゝる也よつて月に六度ツ、其一時のひまに足を達者にすへしとおもひて馬場の歩行をはしめたり壹目目のいや居刀に二尺の脇差をさし立つけにて馬場を歩行こと三十回六十町余也少ツ、増して五里のみちを甲冑に歩行くたひれぬ様にならし置へししからは馬にも乗ること故に五里のみちにてつかるゝことは

あらしとおもふ也こゝに大笑あり泊り番の同心等密にみて御奉行さまもはや丸四年にならせられたれば御歸りを御祈とみえて馬場のいなりへ折々百度詣あり國へ歸り度ものとみゆとて密にさゝやくと也大笑の事也○五里のみちといふは五十里にしていくさ半は至ると孫子にみゆされは定法は三十里多きか五十里也され共みちこそ三里なれと場所のかけ歩行二里位のことにはあらぬ也よつて甲冑にて五里自由に歩行のならぬ人は並々のさふらひにはならぬ也

○六日 大にさむし 江戸より眞書筆をとりよせて遣ふ也この頃勝藏か方々上方より參るふてにて船間也といふことを申越たり江戸筆也とてほこり居たるに案外のことゝ驚てきかせみしに門前にあり直段壹本に付廿文にて八文下直也かゝることいくらもあるへし○今夜去ル廿五日附之書狀相届先以母上様御機嫌克其外之御無事目出度候先第一に申候は今夜はつね也といはひこゝろにてまめのめしをたき豆腐汁小魚を四ツ買ひ

候わわれと御兩親様は一尾ツ、おさと市三郎は半分宛也これにてもいはひはいはひ也なといひてめしを給詩をつくり居たるに御狀に母上の御めて度御はひ被遊候由にて其つまひらか成ことを御記し一族みなよりあつまり候る御盃を被下候由等御しるし御歡之躰御高運のこと是等之義更に心遣ひ無之出來候は新右衛門も此ほとよく御奉公いたし居候故にて新右衛門之骨折莫太也右之如く兄弟三人勢ひよろしきことを御しるしの御盃を被下候い計か難有御事也さらは今夜はならにても御いはひの酒をのむへしとて粕づけの鮎なにてふせり候節酒給申候○母上様之御文難有拜見其内に母上は私之歸りをは御まち被成候得共御奉公之ため遠方へ參り居り候は士たるものゝ常にて公儀の御恩をも存愚痴に歸れとは不思召候由御としよらせ候も御志之御さかむなる貞烈之御事既に私已前木曾山御用中御大病之節大切之御用をわか病氣也なとてこゝろにかくる様なること夢くあるへからすと嚴敷御文なりき其時にしへ漢

母上卓識

謙ナヘリク
タリトヨム
吾アルコト
チ減シ人ニ
下ルコトナ

このこと人
にもよると
いへ共われ
ら兄弟御奉
公の場に臨
とア損と身
知なから身

の王陵か母といふ共御おとり不被成御卓見子は王陵か百分一もなしいさや貞烈に御奉公すへしと志を立候義御座候ひしか七十に被爲成候る御志操におゐてはおとろへ不被成と奉感歎候義に御座候され共新右衛門日記中之様子等を以其御様子を奉察候る夫婦打より袖ぬらし候義に御座候○新右衛門書狀之内御用多なから敬之字を忘れ不申候と之義御尤に御座候御用多ほと静にいたし勢ある程へり下り可申候大切之事に御座候わか母上の御膝元へもはなれ居候と申はわか疎なる所よりして世にも聞へ勢ある時にメくみたる病發したるに可有之と一天下に身をうらみ候外一毫も余事は無之乍去不筋をいたし不申候故今この位にいたし居候と覺申候五十前に遠國諸大夫になり候ものも無之候此味新右衛門よく御心得あるへく候○御用多勢あるときは先例のなきことをせず平日屈たくして痢の出たる養子のことくなること可然被行不申候時は少も屈たくせぬことなるへし新右衛門何事も八分にして置とある尤也八分にてはまだつよし五分

をわすれて
すること多
ふ故にか
くい

位なるへし易小陽は陰に不變老陽は陰に變すこれにても八分にては過るなるへしわれ人と相談するとき下役のいふことゝわか了簡をくらへ八分わか方よしとおもふは下役の了簡につく也夫は六分とおもふは四分位にて下の善をみち引一ツ此次おもひ込ていふ一ツ差引八分よしとおもふこと五分にやうく也故に右之如くにする也勢ある時の八分は品に寄十分に至る也可恐々々○十四日藤左衛門之弓感心也○新右衛門の畫のおもひ附よろし母上の御讚ありかたく候○紀州之人に御逢不被成と之義至極也左もあるへし京都に之はなしに紀州之貸附に寄出奔もの多しと也陰徳をするつもりならば貸附をやめるほとのことなし天下の害あれほとものなし縫殿よりは水野土佐は大金をかりたるなと風聞する也森下のはなしにて聞にいづれもきゝかねたる事也森下孫兵衛取次にてわれへも反物を縫殿を贈りたり塩路新次郎もするへしかゝるもの昔よりもらひしことなしとて返却せり夫を三十日もあるへし○昨日一位殿を御庭織也とてち

りめん二反被下たり是は別事なれば拜戴したり紀州の躰かくの如し○紀州は江戸家老とわか山もめ居るよしの風聞也○岡本近江守より委細之書狀來る其内におさとへ手本をしるしくれたる禮にけしからぬ長き文をつくり遣したるに近江守ふかく感じて其文をいたくらいよ守へ遣し其別昏へわれ十七才之時近江守をみてしる人になり夫より五十年の今にいたりて親しきよしいろく申遣したるよし然ルにいよのかみよりの書面に左衛門尉潔白のよしは兼而及聞居候處丁寧之教示にて逐一承知奥方之義は一向不存候處歌文章と申手跡と申被仰下候通實に不凡之人と相察し候義に而右之文は拜借いたし置友人にも爲見候由或はわか事に感服して此節別而歎息いたし候由等しるし有之候安中之板くら友人と申は宇和嶋侯西尾侯泉侯宮津侯松山侯大溝侯福山侯などに付更に心配には不及候由しるし有之候おさと近來別而かたくなにて女の手跡なとみだりに人にみすへきものにあらすとてふかくかくし居る也岡もとの手本をくれたるとき老

人のこま／＼と手本をしるして百里こされたるに禮申したしとて文をも
勘辨してわれへのはなし書の躰にしてわれより遣したるに存外のこと
に所々の諸侯の評になり殊に男子にかれこれいはるゝははつるのかきり
也とていたくこまりてくどくどいふ也われいふおさとより人にみせたら
はあしかりなむわれへ向ひて申たるをわかこゝろにて遣したるを何そぐ
と／＼といふことやあるとて叱りたり○太郎事小利口なる人には無之候
哉小利口なるもの大事出来不申候こまりたるもの也嚴敷するにしかす何
卒ひどくして心を正敷偽のなき様に御仕込可給候少にても偽をいはゞ二
日ツ、土藏入置候様御取計可被下候いつれにも子供は嚴敷しておそれ
不申してはわるくなる也嚴敷程の慈悲なしとくれ／＼もおもひ候義に御
座候○安中侯より 元陵御記藏板出来たりとて岡本近江守を以わか方々
被贈たり新右衛門一本は御もらひ可被成候寺社奉行のたのめは直に出来
へし是は 靈元院法皇の 聖筆の御日記のこときものにておもしろきも

の也御勘定所に居たるとき此内の例を引て申たることもありし也其跋を
近江守武辨行といふものに長篇の古詩をつくりたりとしより亦も氣はた
しかなることゝみえし也おもしろき事也○近江守よりわれ十八歳の時よ
り別段懇意之由なと申遣したるによりくれたるとみえたり○鐘三郎相談
之事いよ／＼よく相分りて安心せり○われ近江守のことに付るはなしあ
りわれ十八歳の時御勘定所の湯呑所へ行みしに御勘定のうちにては別段
なること鶴の鶏のうちに立たるかことき人あり驚てある人にとひしにあ
れは御勝手懸り之毛唐人よといひき名はいかにと聞しに岡本忠次郎とい
ひし也扱は兼而きく朝鮮人を詩にて驚たる男也とおもひければ知ル人に
なりたり忠次郎といふ頃忠次郎の火はちの前へ行は凡其人定り居たりし
也其風彩をおもふへし夫よりいろ／＼のことを聞てこの人御用向をせす
遊ひ居るといふ人もあれと吟味役位になりたらははたらくへし吟味役に
仕たきものと弱年こゝろにおもひしも可笑こと也夫か縁にて遂に二十年

余たちて吟味役にするまではわかいろくといひし也もとは加賀守殿にすゝめていろく談したる書面のこり居たるをもち出して人にも申せし也加賀守殿之節はいろく差支て小普請にてあり加賀守殿失給ひし後追而其書をみせたるに岡本大に驚て落涙せし也墓をまつりし文ありわか方にあり小普請を突懸吟味役にはいかといふことなと加賀守殿之自書ありし也越前守の頃に申上て御代官になり夫々七十一才に御代官に成七十五か六歳にて御勘定奉行に成七十七歳にて御鍵奉行になりし也これを以おもへは今十七八歳の人をやすくおもふなれと決而あなとられぬこと也市三郎を見て内藤の血筋も衰けるよと歎してしるす也

○八日 くもり 永井能登守被召候由之吹聴有之○異國船の風聞をいふ也いつれもとるにたらす虚説なるへし○おさとけるく也七日目也

○九日 雨 おさととのけるくあまりに早しよき祈禱者ありとて人のいふにまかせてよひしにより立の祈禱のことし乍去こよりをまげて人に持

せて廻さすること也其時に病症をよぶこと也われに病症を問ふ故に奇病也名はなしよつてわか方にては常にげろくといふと申したるに祈禱者大聲をあけてげろくの神はだがしたがした方へつむきやれといひていくたひふりてもみなわか方へ向く也われ甚こまれり亭主に仕た方につむはキャンといひて向ぶむは無余義次第なるへし祈禱者しばし考てトツコに似たるものを書いてこのさはり也といひてかき消すことくに消たるも又一奇也

○十日 くもり又雨暖氣也 父上五日已前少々御過酒之由尤猪口に三ッはかりも多かるへしと後におもふ位也しかるに夜八時頃小用に御起なさるゝに御手足左右共に少もきかす母上大に御驚被成ていろく御世話にて小用に御出被成候由夫は深夜故に少もしらす翌日は常の如し其こと朝おさとへ御物語ありたるよしおさと申聞る故に驚てわれ行てみ奉るに常のことしとの御事也され共強而御容躰うかふに左之御ほう骨の上に

ある筋常よりふとし右に准し左を筋みなふとし我考には品に寄中風御症を發せらるへしとおもふ也右を御眼になみた多し右によれば左に根さして右に發すへしと右に付醫師之事いろ／＼申上れと御聞入なし民藏に申付を御聞被遊内々御斷之由これは酒のことを可申上と之御懸念なるへしよつて我今日急に醫師勝南院宮内を呼ひ御側に御附添申上候へ伺せしに當時御別條なし乍去御過酒ならば御中風のこと必と申上る御左をかたの御こり不宜万一御コロビ被成候は以之外と申に付かけにあつまひらかに用人よりきかせしにさしての御事は當時なし乍去腎分御不足に御かたつまり候間此上御不養生ならば御中風なるへしといふよりてくすりを義申上たるに何分御斷也乍去われを申上る先ッ御なくさみに十日はかり被召上はつになりたり右に付酒は一合余となれりよつて盃を御取やりは御止被成御ひとり分のとくりを定上げたりよつて江戸猪口之内より富士に早乙女の至る小猪口を見出して奉りて右に一とくりと定たり小猪

口にて十はかりありとの御事也けふ夜にいり書をよみ居たるに御酒可被下と之御事に付参りしに母上は常の通父上は寂寞たること也我三十はかりのうち父上母上われ三人にて三升の酒をのみたるにわれはたとひのむとも壹合はかり父上は壹合と定りたりわれ父上のさひしく思召躰をみて歸りておさとにかたりてなみた數行きたれりア、我など今三千の鎗を遣ひ十里のみちを歩行徹夜書をよみて少もつかれすこのうちになにとそ公儀の御用に立たきもの也其内に万々に異國船來らは何卒先手に被仰付候歟或は謀略に加りてとてもよくは出來すとも大名をわか采配につけて一日なりとはたらきて銃炮にあたりて万一敵に向ひて死したらはこれほと願ひはあらしこれほと願ひはあらしとくりかへしくりかへしおもひて人しらす落涙したりわれ井上と同居せし時は井上の老母四十三四にて兄弟三人あり其人々みな七十以上にて死して三人の兄弟今一人もなしされは人生は朝露のことし何卒万々一異國船來ることあらは銃炮のう

ちにすゝみて名を百世にのこしたらは忠も孝もかね全かるへしと氣分頻に引立たり父上の岩のとき御人かくの如し酒を多くのみてはならぬこと也百年の壽を一日にして御用に立たき事也○永井能登守被召近々出立を吹聽來る

○十一日 晴 宋の神宗皇帝の御世に王安石といふよからぬ人ありて天下を亂り遂に宋の亡基ホロフルキをなせり其内に青苗法と云よからぬ法あり人の知る所也今の貸附のとし夫を東坡か弟蘇徹といふ人の論するをみれば錢を以民にかすときは表向は御救といへ共乍去貸出し納の時にのそみてかゝりの役人姦をなすとあり今の御貸附其外にたのみ或はつけとゝけの類唐にては賄賂をとることなるへし其取締は出來かぬるとありさて又錢を百姓町人かうけとるとよき人にてもついで遣ひをする也さて取立の時は嚴敷ければ必牢なとへやる也其次第になりては奉行所御代官所のこと煩しとあり紀州の貸附全この甚敷もの也其上紀州のかしつけをする

ものはみなやま師のかきり也よくて塩路新次郎之類也當表の森下孫兵衛などはけしからぬもの也京都にて出奔もの也といふ也

○十二日 晴 昨日はやりのすこき汗出る朝四十六度也けしからぬ事也此ほとからた至而健也歩行を學ふこと武藝よりもよきかことし絶倒○ア
ンラクハのこと詳成ものありとて長吏を聞に遣したり京都悲田院之もの也答を趣先達へにかはらす返書を躰立派なること非人にも學者有とみえたり

○十三日 晴 來る廿一日いなりへ木辻町の遊女共俄をして奉納すへきといふことを内々願出積にて與力共相談せしといふ也いなり祭には能花相撲位のことほゆるしもすへし吾にして遊女の俄を屋敷内にてさすへしやかゝることを目ろむは大塩平八郎か謀反に同意しての^人あると同一ことにて田舎には可驚ことあり

○十四日 晴 能狂言といふものはならより起る謠曲は興福寺にて公文

とかいふものをよむ節也といふさもあるへし昨夜おさと市三郎等と笑ていふ中間にものを申付ルを聞にヤア何ント仰せらるゝハア心得ました一段と宜シフござる或はそれはくこのましひものちやなといふ也全に狂言師のことし〇二十八度のさむさ也風甚し

〇十五日 晴 月並に禮受ること例のことし〇このほと兩三日風ふくみなくこごとをいふ也われいふならば風吹こと至るまれ也風をいやかりては江戸へ歸られすといふみな大に笑ふ三日ほとつきて風ふけとも少も塵なしめつらしき地也〇父上御不快之事醫師参りていふはしめみ奉る時と變り都而別段に御心よしこれならば子細なし出格の御健なる御生故也と申上る也一同大に安心せりみ奉りては御としの三ツはかりもわかくならせられたり

〇十六日 晴 寒四十度に下る〇昨日いろくとおさとゝはなしのうちいろく浮沈するうちのことなれば人をうらむこゝろあるあるへき

少もみえずといふ故に大に悦ていふは人を少にてもうらむこゝろあるを以士の大に耻とするところ也これによりて 公義のためにゆるされぬものはあれと人をうらむことは露せぬことを三四年來修行せりよりてかくはなりたり乍去いまた熟する所にいたらす此上は天命にまかすること何を卒こゝろより熟し知たきもの也其場にいたらは心のうちより眞のたのしみ來るへしおさとにわか少も人をうらむことなきをしられて大なる歡ひ也とかたりし也

〇十七日 晴 一昨日長吏のもとより注進あり其趣は山田奉行之牢へ何もの共不知十人はかり來りて牢番人二人を切殺し牢内に居たりし入墨無宿二人一同逃去て行衛不知といふことにて其入墨無宿之名前をしるし京都の長吏か同類之ものより召捕方之義たのみ來し也元來遠國之奉行所之威光といふものは既になら奉行所に土藏たりといへ共いにしへよりべりなし與力らか宅等は雨戸をたつるといふことをしらす奉行所之出入之も

のにも盗難はなしといふことを古よりのこと也京都なとしかりとかいふ也しかるに牢に入たるものを外より來牢番人を殺して奪去といふにいたりては残念至極いふへき様はなし御威光に拘りたること也長吏か風聞にては關東にてかられたる長脇差之徒かといふ也われ盜賊方之與力共を直に呼出し大和いせは隣國也必其惡黨共不來とはいはれす所々の番人共嚴敷穿鑿して踏込來るを召捕におゐては直に褒美を遣すへし扱又牢屋敷之義奉行所を去ること壹丁はかり也万々一異變之事あらは與力は鍵同心は銃炮なりとも持出して手向ひするものは一人なしに切殺すへしと申付たりよつてかゝることあるにてもしるへし武士強くなくてはならぬ也若き人別心懸へしと申付たり 公儀の牢を破り囚人を奪といふことは水滸傳ならてはきかぬこと也いかにも残念也 公儀の御所置武と嚴とを以今一段嚴敷ならすは惡黨超過し良民難義すへし夜東海道の旅行ならぬなといふことは可歎のかきり今人牢屋見廻り之同心壹人當分助を申付る

道のりに直
し二里余也

○十八日 晴 昨日は六時より五ツまでかゝりて腹巻を着用冑は不用目かた二十五斤余之大刀に壹尺九寸の脇差をさし六十六間の馬場を三十七邊往邊し其上いなり社の坂六三十歩十邊上りたりされ共腰の刀の當る所は少々豆出來たるのみ足はくたひれす其外辨天社二百五十歩かけなから三邊往來したれ共くたひれすこれにてはまた御用に立へしきのふは腹ことの外にへりてこゝろもちよく歩行は武藝をするよりも薬とみえたり左之方足袋のそこぬけたり大刀の重サ故なるへし大刀は三尺四寸の居合刀也けしからぬ重くつくりたるもの也懸目壹貫百目あり壹斤四十三匁三分之割也此と狙徠の説也○右之足袋に付おもひたり沼田先生のはなしに遠乗をするに右之方は重くなる様にのるへし馬つかるゝといはれし足袋にて其説の尤なることをする也武士は五里の歩行甲冑にて少もつかれざる様ならては騎馬武者たり共用に立ましき也

○十九日 雨 昨夜より再過暖に成今朝四十八度也けしからぬ事也此躰

にて押参りたらははるは米三四兩上るへし京都は百九匁ならば百二匁也
ならば百貳匁といふは偽あるへしいつれ百四五匁する筈也○いなり祭に
付木辻町之遊女共みな狐のよめ入之にはかを奉納すといふ也穢多非人其
外都而なら町人共参詣することなれば木辻町之ものなりとて差留はせず
にはか藝踊は決而ならずと急度申付たり與力共方には先例もあるよし
に而申立る也われいふ先例はあるとも余人は格別我奉行中は決而ならず
と申付たり世々の奉行必市中より俄踊等奉納する事之由也大笑也花を活
角力其外のほり之奉納位はゆるす也○紀州熊野三山之貸附滞として藤堂
家領分之ものを差帯躰之書面に而呼出し藤堂家に而六ヶ敷いふ故に森下
孫兵衛を尋たるに **召状** 封 の此之書面に而京都之振合に而奉行所に而
も聞届になり居るといふ勿論其旨ならば觸書を出しありされはとて觸書
もなき國持領分之もの呼出といふこと相當せず殊に寺社奉行所よりは文
通とこそ申越たれ召状とかきては差帯と同じ召状とかきたる折かけの文

通あることをきかすといひたれと攝津山城のなとに而は宮方貸附滞之も
の共皆宮方にて呼状を以呼出す振合也といふ也藤堂よりはますく六ヶ
敷いふ也よつて寺社奉行所に問合之積下書を認たるに其事響て紀州より
奉行所に以後は藤堂家之ものは呼出すまじといひ出たりわか問合と案文
をかけははや如此遠國の與力等如斯三山も江戸限之貸附ならばまたよか
るへし遠國之弊夥し森下孫兵衛來りて我に向ひはりひぢより錢をとるか
たよろし利屈は不申もとより貸附懸り之家來などは武士氣は一向にいら
す刀を抜をみれば直に逃る心得也夫故に此度も負申候なといひきこれ
不服よりなるへしかゝる男なるに御召御紋なと着用してくる也御家政の
ほと吾ことき愚眼よりははかりかぬる也新右衛門心得之ため詳に記也
○廿日 くもりさむし いなり祭へ遊女共之俄奉納を差留たるにつき聞
みれば黄モンハのぬひくるみを着て珠のかさりものをかつきたるもの五
十人遊女屋より遊女之内きりう宜を撰ひ三人ツ、きつねのよめになりさ

て鳴物は胡弓に琴を藝子共ひくつもり之由よく聞へは内々は組之ものよ
り誘引て御用祭などの意味も有之候歟也しかるを差止たるによりていろ
／＼の事をいふ也遠國のこと斯の如し尤先例はあるとの事也いかなる
事にやよくそさし留たること々おもふ也衣類みな損失になるといふ故に
われもはや三年はかりなるへし跡の奉行之時用ひよといひて大に笑ひた
り

○廿一日 晴 いなりまつり也○宅狀相届く母上少々御風邪之由乍去御
當分之御事之由恐悦之御事也其外之御無事目出度候○平次郎表御右筆に
相成候由目出度候鐘三郎之引移其外新右衛門之家にも不遠と之義此上も
なきよろこひ也このほと新右衛門に少々にゐもこゝろゆるみあらは可恐
のかきり也儉約は不及申事ながら其内にも身分之つゝしみ第一也易否之
卦之彖傳に君子儉徳を以難を避といふことあり身分のこと此儉徳の意也
われら山中之隠居にてさへに此ほと修行中専也まして新右衛門などわか

ナミものは百ならては難成也書中に敬之一字一瞬之間もわすれすといふ
ことを聞て少々肩かるし何卒以前より廿段も頭を下けてはいく／＼と申度
事也され共此事勢あるときたれも知ることなからならぬ事也よつて悪人
と善人を引出してこれを證す鳥居甲斐守町奉行になりし時こゝにて氣ゆ
るみ出来てはならずとてつゝしみ方を咄たり其時は少もいつはりとは聞
えさりし也新井白石勢ひありしとき人つゝしみ方のことをいひて書を以
いましめたり其外菅相公御勢ひの時も三善の清行より危ふみている／＼
と申上たり鳥井は僞ともせむ白石はしらぬ男にはあらし白石はいまたし
らすとせむ菅相公におゐては聖人也され共如此人しらするにあらす行こ
とかたし勢に引立らるゝこと酒をのみて酔に乗するよりも甚し可恐々々
新右衛門など菅相公にても勢ひあるときは三善清行のいさめあり新右衛
門いかに云とも菅相公には不及吾清行には不及といへ共新右衛門には親
孫并身上までまかせきり也新右衛門をおもふこと清行より甚しかるへし

こゝの味をおもひて可恐ことならずやわか恐るゝも又おもひはかり給ふへしよほと人に笑はるゝといふほと懸念をなし人を丁寧にせずしてはならぬ也敬をしはし不忘といへ共敬といふものは箸のあけおろしより一寸のことにも影のかたちを随ふかことくにて東照宮の御宮へ参り手あらひ口そゝきて御宮へ方へ向ひて一足ふみたるこゝろならては敬を不忘とは申されすこの味よく御勘辨あるへし敬と申候得は一言に候得共朱子學千萬の書物只この一字にとゝまる故に諸先生の説甚多し朱先生晩年の説に敬は畏の字これに近しとあり畏はつゝしみ恐るゝこと也恐るゝこゝろしばしも忘るへからざる也○馬のこと御うらやましましわか馬は病馬にてこまる也一眼にはなり老たり乍去別當愛すること子のことし引替ることをいやかる也けさものりみるによくはしる也乍去八十歳位のもの也乗ごとになみた落る也可引替馬もなし當惑のこと也○爲替受取候由不足に候はゝ相廻し可申候差引何程はかり不足に御座候哉○水戸老公齋昭卿わか事

を不凡なりとてしはゞ御意有之候由恐入たる事也彼卿の御事はしばしば我を召れけれともわれ人口をはゝかりて行さりし也彼卿にいられたるは檜山勘右衛門といふ人酒井先生の試合に來り誤にてはしめにわれにいたく取廻され其人藤田虎之介を連來り夫をいろゞ御懇を蒙りし也○晦日の雷雨なら江戸共に同じ不思議なること純陰至極の日に熱雷聲を發す可恐こと也○紀州へ御家來金二十五兩を贈たるに返却して其旨奉行に申聞置たるとの事此程と申最よし御三家方故にもらひても不苦をもらはすといふこと甚よし此一條は今般書狀中へ大出來也感服々々○左助殿へ御事先以安心也これも御骨折なさるへし○鍋しまのこと不思議也○例のねりくらのこと段々夥出來此ほとは至極になり釘のことはさらにもいはす却る申分通に出來る也われよつていふわか世話にめつらしき職を覺われをふみ臺にしてわか所藏計はよからぬもの出來て殘念也と申たるに引替可申とて精品に仕立て一くら差出たり以前の品は御もとし可被下候

惣年寄たよりに相廻し候積也此たひのくらは眞底まで半點の論なしといひし也乍去万一不用になり候は鍋島へみせ候様内匠へみせにやり可被下候以前のくらゐ目かた五十目多しこれは所々に肉つきたる故也織田所藏の品と同じ形也夫によりてつくれり○平川町之出火根本幸にしてまぬかれたりしかし散財なるへし○手いたみの事決而容易にすへからす高年に不及して中氣などになりては大變也父上など酒を御減合此ほとよほとよろし酒のこと御心附可被成候肩へこるは大かたは中氣の症也いしやははかりて時候あたり疝積痰など申也筋へかゝるは疝症にても矢張中氣になる也あんまの上手にたのみ背其外の疝積の筋をももらひ其外中氣の灸てん疝症の灸てんをおろす筋をもませいたみあらは早く手當あるへし父上など強而御すゝめ申たればこそよし左なければ來春ころは中氣必定の所也目やに出ることなどあるも油斷のならぬ事也父上など目やに出るによりてわれ考附たり此ほとは目やに半になりたりとて不思議に思召よし

也○弓のあたり至るよし大に感服せり○井筒いけたのこと今の世にいふは井けた井筒二ツありて井~~※~~紋もかく二ツあればみたりに名を下したる也井をいつゝとせむには板井筒岩井つゝといふにいたりてこまる也其上につゝといふ稱に決あかゝるかたちなしつゝといふものみな□このかたちもの也又けたと云ものに丸きものなし天圓地方也ノ方をけたとよむにてしるへしけたは角といふ詞なるへし都而日のもとの名つくること理を以いふは少多かりていふこと也カミといふことなと上かはしめにて神髪までに用ひハシ端はしめに地のはしとノ間の用をなすものも橋ハシといひ端のところ用あるにて箸ハシといふ類其外蜂巢ハシに似たるより蓮をはちすといひ其葉をはちすばといひ其はなに似たるより蓮をはちすといふ類夥しく多しみな道理には叶はぬ也唐人は螢蛾といふことく字を以いふを日本にては二ツなから夏虫といふ類にて日のもとのことは今のことく道理を專にはせぬ也日火緋セニと數ふるにいとまあらず其内に又錢セニ蟬

セシム鳥梅ウツメのこくとく漢音もあり寺は百濟のことは猿をましらといふは天竺のことはの類三韓唐朝より來るも多かれは一概にはいふへからず○平次郎久世へ禮に行たるに御逢被成たるとの事右は公の別段中の別段なることにて右に新右衛門此ほとの躰をおもふ也可恐こと也さて難有事也○廿二日 晴 きのふいなり祭木辻町の遊女共三十人余參詣せしもおさといふ立派なるものも多ありしと也其内ふり袖なるもの十人はかりもありしよし也われ常に道中のめしもり并木辻の類の婦人をみることにおもふことあり道中のめしもりはつか田舎翁のなしみ位木辻町は與力等を以第一の客として借馬の乘廻されてはては革を剥るゝことぐにして終る也可憐もの也夫に引替て同じく人の慰ものとなりなから大名の妾と成て末は何院様と稱せらるゝも多き也これ全其居る所による也されは居所といふものは大切也良禽は木をえらみ良臣は主をえらむといふことをおもふへき事也武士たるもの立場を可撰こと也既に 公儀御目見以上小役人

多しといへ共御作事方小普請方御右筆の類對箱牽馬之諸大夫にすゝみしは御普請方より明樂飛彈河村對馬位のことなるへし二人みな御庭番なれば外の例にならず御右筆より肥田豊後なるへししかるに今留役よりは久須美中野我ら其外佐渡之中島の類數ふるにいとまなし御勘定二百六十人と留役十六人引くらへて留役の方多し近來別也これは追々に刑名のことと下りて留役などの手にあるによるもの歎それはともかくもいつれにも立場によること也○今朝も馬場にて歩行したり凡二里半ほど歩行せり躰に至るよし新右衛門馬に乗てあとにて快よしといふことまことにしかりわらち二度に一足つゝきるゝ也中間共不審すと也御前は何にて御わらちのいるかといふよし尤なること也未明より歩行はしめ五ツまでかゝり其上奥の馬場故にしらぬ也

○廿三日 晴 木辻町之にはかよくこそ差止たり風聞にては客をねたりて衣類其外をみなこしらへもらひたる事之由ならの郷宿に石川屋助十郎

とて刃キ、にてかたき親父あり夫らなど金二兩出したるとの事其旨を女房聞て大なる角にてむなつくし由男と見かけ被頼たれはたて引也といひたるに女郎にたてひきはいらすとてあまりにいかり二兩はいつはり五兩もやりたるなるへしとて大にさわき女房はさとへやられたるとの風聞也かゝることに似たる事いくらもあるへし遊女屋は世直しとて奉行所之いなり祭には折々遊女參詣する事之由奉行所へ參れば其當坐は客多しといふよし不思議なるもの也さくら五本奉納したりみなうたあり其内に狐なくこん春さきて雲とばけ雪ともばける花のさくら木といふ短尺其外

にきはしくなさしめ給へいなり山神のみめくみねこふうかれ女などいふもありきいなり祭には奉行は麻上下にて金百疋の御初穂也奥方銀一兩用人三人にて同斷給人は壹匁ツ、其外郷宿出入之町人共ことく奉納物あり酒なと三升五升ツ、いくらもあり在方よりも來る也夜四ツ

時頃までにきやか也其賽物は同心のものになる也神主來る夫は奉行之百疋のみ也奉行はいつも五兩以上之いたみ也よからぬ仕くせ也赤飯も壹石ふかしにしめへいるゝにんしん十把も買ふ也二日はかりは大取込也

○廿四日 晴 日々風ふくさむし○此節吾至るころよし○友野先生之跡之詩作其外之直し淺積良齋へたのみたりよつてまつ詩文章一二篇みするつもりなれと霞舟翁と違ひて氣つまり也當年四五月已來つくりたる詩二百はかりありみれはいつれも疵たらけ其上不分其を直し又文章も人いたのまれたる序文其外三四篇やる積之處よくみれはいつれもわろし夫なとを直す也われならへ來りて詩をつくり文章をかくと大字をしるすとは別段に覺たる也人は少も遊はれぬもの也ならへ來りてより歌のしらへ其外みな覺たる也江戸へ歸りてこれを今の十分一にする様にしたき事也乍去かゝることある故にならのひまも氣くされぬ也

○廿四日 晴 さむし泉水氷る

○廿五日 御用日此ほといろ／＼の話の序に我苦勞多からむ新右衛門は
いか成らむなといろ／＼いふ故に只今新右衛門方日々出にて金錢も自由
何不足なしよつて苦勞第一に多し其内にお千枝苦勞多し其譯は居候二人
あり其内女居候など別々世話やけるなるへし其上にい／＼と考みるに
居候か御客さまかの躰なるへしこまりたるもの也何卒お千枝の心配を減
し居候は必居候のことくに嚴敷取扱たき事也別々女の居候などはめした
きの格なるへし太郎など並々の居候にて十分也只々お千枝の心配少やう
にいたし度ものと申たりき敬次郎などより太郎はわかまゝにて不宜由に
付一同御客さまの御取扱とみえたりこまりたるもの也嚴敷して後々のた
めにしたき事也太郎人まねをなしわける口をきくとか人のいふ也其節は
手まねは手へ大成灸をすへ口まねは口のはたをひとくつめることゝ定へ
し

○廿六日 きのふ並便とゝく○母上の御狀拜見難有殊にめつらしく新の

り被下難有候十日はかり前に久須美より返禮にのり五帖來る三帖は院脱カ一乗
宮へあけたり今のたよりに母上より賜り村田翁より十帖くれたりなら奉
行になりのは十分に給ること也柿を献上すといふになりて柿は少し大
笑の事也○岡本近江守之代筆を淺野中書するして詩作來る文通之内にお
さとの文と書を板倉伊豫守殊に感して所々へみせて其まゝ臨摸すとてい
またとめ置とありおさと大に迷惑したり近江守は朝鮮人唐人迄を驚した
る人なるにおさとの文に大に畏れて殊に賞するはおさとの仕合也岡本
詩は上手なれと元來和文はあまりにかゝす夫故なるへしわれより詩を贈
りたれと一向に沙汰なし勿論何も賞譽なし其筈也岡本は新井白石の詩其
外名家の詩を直してなるほとゝいふ様にする也來ト山陽吐血の詩は天下へ
聞たる詩也夫を山陽にたのまれて直して死後にやりしと近江守われにか
たりきされはわか詩などを何ともいはぬが却るまことの事也人はさきの
得手の藝へかゝるは大に損也夫を學者へは六ヶ敷手帑をやるなとよくこ

ゝろなき人のする事也手かみには必ひらかななるへしわれ林大内記其外
之文通みなしかり○けふは春日まつり當場の田樂能にて用人出役する也
酒をそゝきて神おろしをなし振動拜の禮などあり古風かきりなき事也

○廿七日 くもり 春日之御祭例之通十萬石の格にて出る也十萬石の格
はしらねと中道具共に鍵五本也ちや辨當茶道などつるゝ也大笑也○なら
の人春日祭は世界第一のもの也とおもひ居る也乍去人の出ること神田祭
の飯田中坂きりの人の四分一なるへし京大坂より万引すりの類來りて盜
する也なら人常にひまなればみな盜まるゝ也大笑のこと也

○廿八日 晴 後日之能也○川上金五之介方唐筆十本くれたり追啓に
われ奉行になりて古き金公事を取上る様になりて公事を買歩行もの多人
難義する風聞ありとあり一向に不分われ奉行になるまでは天明以前の公
事を取上たるを京都の例を引移して寛政十年より取上ることゝ成たり證
文讓受之書附も取上ることなるを止たり取拵代人共嚴敷する也しかるに

此風聞いかゝ兼おも聞たり其節内々さくりみるに金公事以前よりも多き
は無相違公事もち出すもの多ければ也これ無余義にいづる也證據ある
を仕舞置は損也といふよし也これは仕かたなし兩なからよき様にはなら
ぬもの也

○廿九日 くもり 御祭も無滯相濟○われ十五六の時より布衣以上之役
人に成たし一藝に名あるものに成たしとて金比らへ朝參りなとしたり
父上はわか至而幼年の時をわれをよき人になしたしとて日々塩斷也き
父上の御教は別段なることにて胎内にあるときより日々書物を御よみ被
成母上などに三味線の類は御きかせなかりしと也以上のこと母上に今伺
ひて新右衛門などよめにはなすへしこれはよめ妊身と聞はしるす也さて
布衣以上にも成り諸大夫にもなりたるに御祭なり假初のことなからわれ
一度なり共先箱二人道具にて先徒六人駕脇六人にて歩行へしとはおもは
さりし也人の行末といふものははかられぬもの也われならへ來りしは所

望にはあらねとも此供立にて出ること父上に一目も一言も御目にも御耳にも達しかぬることとて輿中にていつも涙をおとす也母上はわか結構を御覽なさるゝのみならず新右衛門の此節までを御覽なさるゝ也御高運かきりなき事也わか口より申すはいかゝなれとわれと新右衛門迄御そばに並ひ居ては十二分過る故に天道満るをかきてしはしかなし給ふもしるへからぬ事也よつて母上も只天道を畏れ給ひていろゝのこと思召ましく候新右衛門壹人にて母上位御運の人世に少し

○十二月朔日 曇 月並之禮受ること例のことし○十一月のはしめ久須美より海苔五帖來る其頃の新海苔はめつらしよつて内三帖は一乘院宮へ内々上ケたりけふ聞は其頃御家來江戸より歸りたるもの土産にあけしのも古のりにて新は至あめつらしよつて一乘院宮御母儀に相立居候 先帝の御殿へ其内一帖半を被遣たるよし也いかなる所迄右之のり出しもし

らす恐入たること也

○二日 くもり微雪 いせや榮藏のたのみにて春日大明神の五字を神主正三位ちとりに書せたりちとりといふ人書もかゝす文字なき男なれと其書ふり目を眼したりいかにも位あり神孫にて代々神主にて千年來連綿として居る故に氣分公家か大名のことしとみえたりよつて書は心をかくといふことまきれなし氣かあからねは書に風韻雅致は少もなしとしるへしまねては參らさることしるへし書家といふ手習師匠の書いけぬはつ也
○三日 くもり 岡本近江守より

月ならて雲の上まですみのほる是はいかなるゆえむなるらむ
とよみし油煙齋といふ墨師はいつの頃の人也といふこと問來るしらへみ
れは當時の古梅園の曾祖父元泰貞文といふもの大墨をつくりて 天子へ
奉りし時大坂の鯛屋忠兵衛といふものよみておくりし也狂歌の名は貞柳
といひたるよし也世には偽をつとふもの也貞柳は享保十九年八十一歳に

て没といふまで申來たり

○四日 晴 きのふは六時より五時まで大なるやい刀をさして甲冑にて歩行したり其みちのり三里壹町余少もくたひれす人はならしによるもの也
○今日わか工夫したる紋附惣まき繪の小サ刀を法隆寺のみねの薬師へ奉納せむとせしにおさと強ふとむる故に又やめたりよつておもふわか一族のうち若き人のうちを見立て歸らは讓るへし右に小サ刀は芙蓉之間の役人着坐の節さす小サ刀也新右衛門などへ今ゆすりては當り前のことにて必入用なるへければおもしろからす今は普請位の人之内より鑿定してゆすりたきもの也我おもふ旨ありてこゝろをこめしものはならの寺へ奉納せむとおもひ切しか又おもひかへて返りて後のこととせり○昨夜夜四ツ時頃道中六日切之書狀相届くにとか申候よしの女之義に付御深切可申様も無之御狀參る右は別記にて御返事上る先以御一同様之御無事目出度奉存候○アンラカ相届候由承知右は御申越之近來之絶妙のつきほに候は必

出來可申なら等へつきもおもしろく候乍去藥効は少も有之間敷候本草によれば至而甘美なるものよししかるに一口もくはれ不申候ヨクイニンを日本へ植候得はみな珠數玉に相成申候一向に役に相立不申候アンアカも既に性を變し候上はもとより藥効無之段必に御座候龍眼肉のこと尤珍談右はかたちはかりに候哉味もよろしく候哉かたちはかりに而は白き西瓜箔置之木刀と同事に可有之候橋など所々有之候得其實物は日本に大和の春日社外に一ヶ所有之候計と申候眞淵の説有之候○寒氣もつよく相成候由ならも三日には少々雪けしき氷はりつめ申候三十六度の寒に御座候○岡崎にて之御取扱驚入候みなこわき事に御座候別段之義を承候たびことに至るおそれ候○なくらにて御手いたみ御本復之由何より之大悦乍去尙御心附可被成候畢竟筋へこり候毒有之候故と奉存候芍藥甘草附子湯至極に御座候百日も御用ひあるへく候下手醫者の人をあやまること多し可恐事也右に付調役之御考尤よろし○高野山學侶行人灌頂の争ひ十八年

相懸り一席にて内濟双方を喜び右はマクレ寺ながら藥効に御座候○御結納横山家の被遣候由目出度候みな公儀に御恩也乍去新右衛門に出精よりも有之候公義の御恩は月也御恩を受る人は露也水也出精次第にては海の水池の水大河の水さゝのは末の露とかはり候得共月に私は無之候受候人の大小により申候大なるほと御恩も多く御座候別御奉公大切に御つとめ可被成候○十一月十七日出之日記相届候由刀を義さめ義御丁寧に御申越却ゐいたみ入候○前をくすりの木に付論有之候新右衛門をなくらの論と同じかによくみえて正宗のとき刀と刀莖及模様少もかはらすしても少も切レ不申候は畫かける唐からしと同じことにて夫をよき刀也とたのみ候は、大變出來可申候役人も又しかり少もことをせず見場はかりよろしく候も其任の出來不申たとへは留役を吟味の是非重キ人ならば人物を撰ふなどいふこと人まかせにて是又アンラクハにて却る藥のある丈大害をなし申候下劑其外メンケンすれば人早く其毒を知候故用

ひ不申候得共似て非なるものを用ひさして其時は害なきかことくにても其つもり上下相欺目出度きの恐悅の穩のとて申つくしたるはてはは其毒の打て出たるときは藥のいたし方は無之ものに御座候附子大黃は人恐れ候故毒急にしてあさしアンクラハの類は効なくしておのつから毒となり人をしらすくして害すること多き也毒藥も死せるときは死一等をなためらるれと似せ藥は一寸にても死に處せらるゝことにてしかるをなみくの人にはせ藥のさし當り害なきことのみ目のつきてゆるす故に名目重く相聞候得共事實に寄罪科別段なることのケ條を出して寛保を律に御教ありし也大岡越前など享保より寶曆已前まで人は眞の眼ありしとみえし也右をこゝろにて唐を歴史をよめは隠し様はなき也乍去事をせずして自愛は中醫にまさるといふこと所もありこれは曹參か蕭何の跡を引受て漢の天下を治しといふ類也乍去いつれにいたし人も人材其人ならぬことにてはきれぬ刀似せ藥の類也新右衛門など追々ことをする

人なるへければ心得のためしるす也

○五日 晴 少々暖氣也ならへ來り四年のうち硯氷りしこと一度もなし池の氷けふとけすかさねて氷ることなし朝はりて夕かたはみなとくるなり夏あつき故たけのことはあり○新右衛門の日記をみるに朝寐られぬとみえたり追々しかなるにはこまる也夜四ツ半迄必書をよみて朝は七ツ半時也三時いぬるを大悦とする也これにはこまりたるもの也○今朝馬にのる別當のかほをみておもひ出たり別當のかゝ又子をうみたり月たらずにて無間もわるくなりたり齒貳本生居たると也別當かゝの所爲にしてかゝを打擲し大酒して嚴敷しかられたり出産に付金貳朱遣したるにもち歸り大にかゝを叱り汝か子をこしらへたればこそ上にててもかく御厄介か出來たりとて又頭を打たるよしみなくわらひことにする也生なからに齒のある人いくらも多し日のもとの 天下の御うちにもあらせられしかと覺たりめて度ともいふへき位のこと也

○六日 晴 重きものをもちなるれば軽くなり日々歩行すればくたひれすこゝろの修行もかくありたしこれも乞人は乞人なるゝ類なれと夫にあらず聖賢の位地は大造のことなれと兼而難義ならぬうちなれてこゝろをたのしみたきこと也この頃工夫をする也歴史をよみていにしへの人のことをみてわか身と引くらへみるかよきに似たり其度にたのしみを求出すかことし

○七日 くもり 來年は新右衛門よめ出産あるへしと事なれはいといとめて度新右衛門に似候へと新右衛門か生し時のことをおもひ出るまゝ記す其余は母上に御伺候へ新右衛門か生れしはわか七歳の十一月也いとさむき曉と覺たりわれは御祖母の御ふところにありて曉めさめしにねゝさむか生たり静せよと仰られたり其余の詳なることは追々聞て覺たり其頃は 行道院様所々の對客登 城前に供壹人を被召連たれば女なし伊助といふあから顔にて眼つきおそろしきか壹人居たり母上は御祖母君のこ

此伊助新右衛門を常に
かわひかり
て人々愛す
る子也とい
ひては高慢
せしことな
とありき

此綱四郎翌
日まて死せ
るなりと居
たりいなか
大人也とい
御祖母とて
りし御笑な

とより朝夕の釜もと洗濯共に万事御引受也その伊助は御ともに出るはか
り折々思きせ貞に水をくむはかり也既に朝霜のつよみちあしきか岩ほ
のこどくに氷たる所にて母上手桶を御もちながら御ころひ被成たり御い
たましきことに覺て其頃の御顔は我今にいたりたしかに覺居る也いかに
も此御くるしみをばまぬかれ様いたし上度ものとおもひし一條は紛なし
其節のこと母上へ御伺なされて知るへし御妊身故に水くむとき用心せよ
と仰られて御祖母きみの御いたはりありしことも幼ころにうれしかり
しを夢のことくに覺居りかゝるわけなるに夜になりて西國の人來りたり
これ乙津村の後藤彌四郎也このもの今にわか方も來る也其時母上は少
々虫氣附にて被爲入たるよし夫はわれしらす俄に食事といふことなりし
よし下女といふものはなし母上の何事もなさるゝに右ささわき故に蕎麥
をとりて給さすつもりになりて其ことをいひしに田舎ものゝ質朴なれば
蕎麥はきらひなりと申たりよつて母上のいさゝか虫のかふるを御脈へな

新右衛門よ
かく奉るこ
かへわな
と中々わか
類の不孝な
めらにもよ
らしめし太
らしめす也

されなからめし拵をして給させ給へり其ときのこととはつかにところゝ
覺居る也われは御祖母君と臥して前に記せしさま也今を以おもへはさむ
さのつよきたえかねしときを覺居るはかりなれといろゝとおもひめ
くらすに御兩親の御苦勞はけしからぬことなるへし右さわけ故に母上は
日からも御立なされぬうちに新右衛門かをしめの洗濯を遊はしたり寒中
其上にいまた御肥立なき故かみるゝ御手其外へむくみ來りたることは
覺居たり其後雇女はなされす夫々御祖母君の御手傳あしかとうろゝ覺
れと今はしらす是も母上に御伺あるへしこのときの御ことを新右衛門ら
か子々孫々へも傳へ第一新右衛門落涙感佩しておもひ奉りて其ことのこ
ろを忘れず子孫の貧窮になること決あなしわれもまた同じこと也かく
御苦勞にてありしか御祖母君へはわか店のうち田と云酒店へ行かもの立
うりをかひて上られたり常のことなりしやしらすわれ母上と錢湯へ行て
歸りに母上の御手傳に竹の草つゝみをもちたることをいさゝ覺居る也乍

去其時にてもわれ等か手習かみは必白帯也き其白帯いつくか出かけむ今
おもへはみな母上の御あふら御涙の集りなるへし恐入たること也前にい
ふこと少も疑しきはかゝぬ故に足らぬ所は母上に伺ひて新右衛門家の万
世のかゝみになし給ふへしよつて記す也右に困窮にて鴨などを差上られ
しといふこと別に藝の費を少も御いとひなかりしことなどは別あしるへ
きこと也父上御酒被召上ことはわれ十九才の頃より也御下戸とおもひ居
し也いかなるときにか有けむはつかの酒なるへし銅のちろりへ入て少々
被召上ことありき其時新右衛門二ツか三ツはかりてチロリを覆し夫限に
なりしことありき其節の余事是にておもふへし与風新右衛門家万々世の
基をしるしかけてこゝにいたりてしるすこと不能故に筆をとゝめぬこれ
らのことは内藤川路井上のものは日々三復して万世の修行とすへき事也
この御記の一くたりよむにたに身にしみたゝ泪こほれてとゝめあへす
實にうからやからに行末よき御をしへくさいとありかたきことになむ

おほえてよめる

高子

子らか末立さかえよとたらちねか其身をつくしいともかしこき

霜雪のうきめしのきて春にあふ今の操のしるきは木々

末遠くかゝるをしへを子ら孫ら家の風にも吹つたへてよ

○八日 晴 昨夜微雪當年はしめて也○けふ惣年寄へ一荷いろくくと取
集て渡おさとみなしらへ也○永井能登守御先手被仰付候由この人久須美
の別段の人撰也

○九日 微雪 おさと歩行して身をこなせと醫師段々といふ故に其こと
をはしめたりけさは雪はれてけしきよければわれもおさとゝ共に庭を歩
行たりかすか山のけしき絶景也くも半かゝりて村らくと雪のふりたる
晝のことし泉水のふちを一廻り廻れは一町半ある也

○十日 晴 夜あられふる今朝二十九度のさむさ也泉水厚氷にて半夜の
あられ玉盤上珠をちらせるかことし當年隨一のさむさ也乍去すゝりに氷

なしこれ江戸より暖氣なる故なるへし池の氷もひる後はみなとくる也○
中野石見守大坂町奉行被仰付候旨申來る

○十一日 晴 ぐすりにもとくにもならぬ烟草とちやはむきのよきかよ
くうれるなりといふうたあり油煙齋とかよみしなるへし○周公の方の
美ありともおこりかつやふさかなれは其余はみるにたらぬといふこと論
語にあり吾夫によりて周公の方の美なくともおこ^うらすしてやふさかな
らすはみるにたる人なるへし役人のこゝろこゝにありよくつとむへきこ
と也

○十二日 雨過暖也 順作法華寺御所より御頼にて御同所之御居間其外
之御繪をしたゝめたり繪はから子遊ひにて極彩色也よほとの手間もの
也惣金にてきぬ地也江戸ならはいつれ五六兩以上之畫料なるへししかる
に金三百疋に畫料として紫のラセ板羽織地被下たり紫故に羽織にならす
奈良いつ方にゑ買候哉と取替候積にて内々用達に聞しに法華寺御所は近

衛殿之御息女御入室之積にて此ほと御普請ありし也よつて何もかも近衛
殿御差圖也右に付畫謝禮之義近衛殿の内々伺たるに思召にて奉行之家來
ならば衣類其外に不足あるまし風流人なればヒフなどに紫よかるへしと
近衛殿いろく御世話有しといふことを聞出し無勿躰事也何色にてもよ
ろしとて取替ことをやめに仕たり

○十三日 晴 至る暖氣也すゝ拂例之通也○なら町人何そ身の守に成わ
かりやすきこと記してと望こひければ正徳の高札の意わするへからすと
記し遣したりしかるに其もの又々願ひければ韻語にて文章をしるし遣し
たり其意は商人は四民のうちにて最卑きものなれば其卑きを忘るへから
すさて又商人の家といふものは錢あれば昌^{サカ}へ錢なければ亡ふるもの也さ
れば錢を以性命とせりよつて錢を以教を示さむ錢は周禮に泉とあり泉の
ことくなるもの也よつて高きことをきらふ也故に飲食必卑くし居所必卑
くし夫より人に應對より諸色の直段其外共に都る卑くすれば其卑きを錢

このみてみなあつまることたとへは泉の山より出て日々に卑きに流れて海にいたることく其家に泉のことくに錢あつまるへしといふことを記し遣したり○す、拂に付おもふは友野先生のかたへ煤拂にやとはれて必行て先生と高柳へ行し鋳次郎并源兵衛夫婦先生の妻など塵にてつくりたることになり我も二百文の日傭かはりに椽頬其外共にふき掃除等をなして夕かたは大に草臥たり夫は三十四五年前後のこと也しかるに先生の兩親源兵衛夫婦先生并鋳次郎とも泉下の客となりてのこるもの我と先生の妻はかり也可歎こと也夫に付おさと、おもふはある人金子多くありて御役中に土藏に藏し置しも多かりしと也其人死して盜賊にとられたりさても苦勞なること也われ今旅行だけの貯あり其上には金子の望もなし此上百年之壽のうちにたゝ心にはつることなくしてよを穩正にすすすへしとおもひ定たり人に藏し心配をして金をため晝夜番をして人にとられ瓦石と同じきことならずやまたも盜賊にとられたればよし子孫に奢をさせ遊女

にとられ酒食に遣ひ子孫をして災に逢しめるいかなることによ我こゝにこのほと工夫よく附たり夫故に刀脇差も一わたり武士役まで也武器馬具またしかり諸物に一向に望絶たり夫に付いまた望あるは一尺六七寸のよき脇差壹本を買てクサリナハの刀と大小にしたきおもひはまたあり其外は世のこと今かくしたきといふことなしこのこと新右衛門などのこゝろ得になるへければしるす也子孫によからぬもの出来ればたからを贈りても三年のうちには貧人となる也子孫に人あれば金錢なくても金錢に患ひなし佐々木脩助井上新右衛門みな至極の貧人也今を以おもふへし生駒善右衛門一万三千兩を只もらひし人也老後夜着なくてありしをわれ新右衛門もまのあたりみしこと也世上のことかゝることなるに不筋のつとめをなし不筋之心配をなして人の氣をとりて其あと前のことしよくおもへは可笑のかきり也○いにしへ謝顯道か明道か獵を好まれしかおもひ絶てやめられ其念慮絶しといはれたるを聞て夫はみたりにいふ也なかゝこゝ

ろといふものかくはなりかたしよくつゝしみ候へと云しにのち獵より歸るをみて忽に其氣起りしと云こと近思録にみえたりわれかく刀劔其外の念慮をたちしに今以前のことしこのめることにかつこといとくかたしおそるへきこと也刀劔は小事也其外のうち官位又は名と利とのこといかにあるへきこのほとかくなれと又々破るゝことありてはならぬ也なら奉行所は刀劔をみたくてもなし官位名利のこと少く桃源に世を避し人のことくなれば却る心の修行少々出来るなるへし世の中ことかくの如しとおもへ定ても江戸へ歸りたきことは少も減せずこれも天にまかすることはよくしれりされと少もおもはぬといふにいたりては却る禽獸なるへし

○十四日 晴 今朝馬場を甲冑にて歩行二里はかり也甲冑皆具にては二里はかりにて大につかるゝ也尤大刀大脇差をさし其上に十篇之内二度つゝは急奔する故もあるへし三貫目の具足にてかくの如し五貫目前後の具足にては歩行一里の人江戸の士にはあるへからす本多中書など三貫目の

具足也こゝろあることなるへしいかによき甲冑にても着用して一里も歩行漸にては捨もの也

○十五日 晴 月並々禮受ること例の如し○きのふ中野へ反物を遣す其追啓へ出まかせに

難波江のよしをかさねて早歸り虎の御門の跡を追らし
としるしやりたり狂歌と本歌と半分宛も大笑也池に氷なく庭にとりなき
てはることし

○十六日 くもり 至るさむし三十八度也乍去氷なし不思議故泉水端へ器を出しためしみるに三十七度半也常に坐敷と庭五度を違へりけふは坐敷のさむき日とみえたりよつて馬場にて馬をのりたり老馬足少々いたみ片眼なりたれとこのほとさむければよくあるく也可惜馬也のるごとに落涙する也

○十七日 晴 けふは 東照宮の御忌日なれば例々通七日の潔齋中に付

朝六時より甲冑にて馬場へ行五ツ時までに三里二十町に近く歩行せり三里二十町といふは馬場の往返三百六十七歩たつみのいなり社の坂上り下り二百歩あり夫を二十往來したり馬場は五十往返したりさして草臥たることなししかるにはいたての麻上品を用ひたれとコハバシナクなり居る故にもめたるとろすれ合てその所すりきれたり今の甲冑師の造りたるならば必わるくなるへき也孫子軍争篇によれば敵陣と味方の間三里は必あること也其みちを馬にのりて行とも今の世はみな馬より下りて鍵合奔走すること必三里はあるへき也よつて三里ツ、は歩行する積也月に三四度は近頃必かくすること也甲冑惣目かた三貫目位にて二尺三寸に壹尺三寸の脇差をさし三里歩行し馬にて五里往來せねは武士の役はたゝすとしるへし前の三里といふは孫子にある三十里は日本みち三里なりとあり後漢順帝紀に李固か上書に軍行三十里を程とすとみえ司馬仲達か公孫淵を討しにかたみち百日つもりにて三千六百里とあり日本の三里余なるへ

井けた井つ
い前と合み
るへし

しいにしへは馬専らなれば足輕の兵まで馬にのせしこと太平記にみゆ天正の頃よりみなちちなりたりこれ一變也

○十八日 晴 いづゝのこと前に二ヶ所に論せり伊勢物語古意二十六枚につゝ井筒あつゝにかけしまろかたけの歌を真淵解ていふはつゝ井は一ツの井の形也井筒はそれか上に落もらせじの料に即其井の形に構ふる故に井筒と云されはつゝあつゝとうたによみしは筒井の井筒を略して筒井筒といへりとあり又同じ所に井に名多し筒井は筒のことくに丸にほりたるを云板井は板もて四方にかまへたるをいへり今俗に井つゝといふは是か上の形也とあり

○十九日 くもり折々雪 昨夜夢に新右衛門入來之由おさと申に付驚て欠出したるに帯なし手拭を帯にて参りたるに新右衛門たのしからざる躰にて母上と一諸に臥り居起出て吾に逢たりよほと年よりたる躰也われいふ新右衛門御用多にていろゝ心配之由兼あしる所也けにもとおもふ也

としふけたりさて用はいかにといひたるによほと六ヶ敷事也とていろいろ考たる躰也さらはいかにと再ひとひ返さむとせしに夢さめてはや六時なりければ起出て其旨おさとにはなし世の中に夢幻泡と佛書にもいひて取ところなきものにいひぬさてまた血筋の者のいろくの事に逢たるに其以前少も夢にかはりたることなし其外身分に付是は大事とおもふ夢をみて満身汗をかきたるに其後少も子細なきこと也よつて夢の少も役にたぬは分明にする也されとかゝる夢をみしとおさとに語りきしかるに夜に入宅状來る心に分明にしりなからも先平安の字よりよみて半分は安心しなからよみたる也しかるに別條なし其上に母上の御機嫌よきとの事第一の悦ひ其外も無事別事なし大安心也夢の事莊子に聖人夢なしといふことをしるしたるよりいろくといへと周禮に夢を卜することあれば夢のしれぬこと明也しかるを偽のこと書物にある故に人々迷ふ也乍去たしかに我心は定り居なれと新右衛門の事を朝夕にいろくと案しおもふこと

わか身に過たりわか身に過てはいかゝなれと第一に母上第二に孫第三に狂女第四に身上かくもまかせかたきことをまかせ切にする故にて其上わか身の上のことありても以上之患なし新右衛門に間違あれは以上みな間違ふ也故に新右衛門を思ふこと我に過たることの實なるを思ひて夫を主にて日記をみるべきこと也○狂女縁談のこと風聞のこと露疑なしもあるへしこれにかきらす縁談事の風聞親類縁者といへともあてにならぬ也それはいろくと身に覺あること也新右衛門の世話にて事實相分りて狂女一ツの運を得たり其世話したる人のいろ此一事にかきからす万事につけておもふべきこと也ア、此末いかゝあるべきこれ故にわれ常にこの外に案しおもふ也○鍋島のこと驚入候さもあるへし乍去我らかよきいろ得になること也○おふさ縁談之事に付根本之相談書一覽候處存寄これなく候いろくのことあれとみな夫は人の口也乍去肝煎に成直に世話取扱になりしよしは偽あらしさらは世話取扱といふものは悪黨にては

喜にことし
のふみも收
なむあとの
喜ひはるに
しるさむ

出来不申候並の人のかたき男のなる役なれば人物もいかゞにもあらしい
かゝにもあらしとおもへは高も二百俵なれば其上に存寄これなく候早々
御取極可被下候これおさとにも申聞たるに同意也○敬次郎事はいつれと
も新右衛門と善左衛門との御相談之上可然方に御決し可被下候さて又な
ら表へ御遣し被下候てもよろし夫は送り参り候人にも寄可申候左候は、
太郎一同御越候もよろしく候敬次郎参り候序太郎参り可然候乍去右等
之義は遠方よりの考にては参り不申候間可然御取計可被下候○入用之書
付詳に御申越候而忝候夫にて凡之義も相分り候新右衛門へ身上まかせ切
にいたし候上にいと申遣し候もいかゞに候へとも元來くり出しわかり
兼候間申遣し候事に候其上は追々申遣し候爲替金にて御承知可被下候○
狂女之事に付新右衛門段々之御存慮御尤と申は申迄も無之義御深切之か
きりおさと一段感歎これに過不申候くれゝも左衛門尉におゐては少も
ゆるしかね候やつに御座候乍去兩御養父母并おさと別ゐいろゝと申候

る嘆息候○新右衛門平日行跡之義詳に御申越候而左衛門尉は中々及ひ不
申候義と今般之書狀に別々驚入候而感心之至に御座候御申越通に候は、
少も存意無之候去ながら奈良奉行と違ひ候而所々にて目を附候義に付い
つれにも方正嚴勵之義御守り可被成候守り候上に別に可申進義は無之候
新右衛門之慎左衛門尉之第一之喜に御座候

○廿日 はれ 昨日の微雪にて今朝ことにさむし

○廿一日 晴さむし めつらしく氷の上へ石を投てすらくゝと行ことく
に成れり伴金左衛門より古物之義に付申來る品も有之に付右之返書いた
し候に付与風考候處周易の法終を尋てはしめをしろといふによりて日本
書物ありてより 應神天皇より御末 仁賢天皇の御代まで日本書紀によ
りてしらへみるに御十代にて二百廿七年也よりて 神功皇后より 神武
天皇まで御十五代をしらへみるに日本書紀之通にて九百廿年也しかるに
御十五代は二百廿七年之割を以しらへみれば三百四十年となる也三百四

十年 應神天皇の前は前漢の末にあたる也しかるに周惠王より割てある故に九百廿三となる也ならし六十年ツ、に當る也勿論いにしへの人年みな長壽なれと御親百年の御壽にて御子廿歳の時御誕生なれば御子百歳までの御壽ありても御代は二十年ならては無之候に付先ツは一代二十年つもあり位之もの也

○廿二日 くもり かくまで寒けれと夜はいさゝか暖也とみえてさしてさむからすおさとたと足のひゆることなしといふ也我などは猶更もお千枝にカシハメントリの足の黄なるを給さすへし至る養ひになる也染など近頃弱なりて夫を給大に効を得たりといふもおさとも給さする也よほと効ありと云

○廿三日 晴 あたゝか也泉水の水全にとけし也○けふは與力同心共之内にして學問所鎗劔術出席多々人々へいろのもの遣ス

○廿四日 晴暖氣也 乍去少々氷あり

○廿五日 晴 此ほと御用追々相濟寂寞也去年已來出金にて當年追々貧人老人を救ひみせたるにならもの喜しとみえて當くれも一々目前後數十人出金せり

○廿六日 くもり 御役所小遣ひ御役所欠所之ものを盜る今日死罪に相成御役所昔より盜賊なし與力宅共雨戸を建るといふことなし右故御土藏たりともべりなし夫故にいろゝのものを今般被盜たり十四より御役所之小遣ひに成當年四年也憎きやつ也

○廿七日 過暖強雨 ならに町人の内墨や小右衛門とて富るものあり其もの醫師を以町人の守となるへきことを可成は長壹丈ばかりに記してよといひぬ立派なる帛を越したりよりて斯をしるし遣しぬ寧樂に男の子あまたもたる人其子らに行末なく教ふことを假名もて目やすからむ様にしるしてよと望こひぬよりてつらゝおもふにいにしへより文のまきゝに教を述ること多かれとみなよく身を修といふにこまれることにて

其身を修といふはいかなることそといへはよく身を全すること、おもふへしさて身を全するに第一にしるべきは、公のおきて也其おきてのうちにもわけてしるべきは市町に掲て人にしらしめ給へる正徳の定ふみにこそあれ其定ふみに親子兄弟夫婦をはしめ諸親類にしたしく下人等にいたるまでこれをあはれむへし家業を專にし懈ことなく万事其分限にすくへからさることあり夫を能守るべきことそ人のいふをきけは此文望乞男常に子らに教ふるに公の御めくみを忘るな親によくつかへよ茶の湯などの遊ひ藝を專になせそといふよしこれよき教にておのつから定めふみの趣に同じ故に定ふみをまもれば則親の教にたかはぬ也万事分限に過へからすとあれはつゝしみて諸事儉約すへしきはもとよりのことそかしされはよく守ときは孝行はさら也諸親類までも睦敷家いとやすらかに治りて分限にを過ぎぬのみならず家業を怠らねは招かすして正しく寶集りて多くの子らか家々行末ひさに富さかゆへしこの事の廣まりてなら人のみ

なかくもあれかしと喜びて記しぬ喜永二とせの冬寧樂のことつかさとする翁しるす

○廿八日 晴 歳暮を禮受ること例の如し○與力同心共骨折たるにより御褒美を金を出方なしより昔は奉行與力同心に薪をたりし六方山といふ薪山はけ山になりて捨りたるを寶曆のころより捨置たるかよき山と成たれば其山内にて根廻り五寸までの小木をきりて與力同心へ被下積伺え通御差圖濟たり右に金六、二百目に成夫々わか見込にて出精を高下により割渡を義申上たるに江戸より見込を通可取計旨之御差圖濟也夫を夫々の割渡したり奈良奉行はしまりてかゝる御褒美は今般はしめて也とていとみな難有たり

○廿九日 晴 今日落著もの至多し右に付左に通に成○豪家のものなるよし懸物にするとしてたのみたればかゝる文章をしるしてやりたり

商賈之家有錢昌無錢亡錢者商賈之性命也錢周禮曰泉今暫示以泉焉泉之

爲物。生山中至卑之實。不選分寸。唯卑是奔。涓々綿々。成川成淵。終極其根。海者天下之至卑也。故涓滴川淵。輻湊來。錢亦如斯矣。汝置身於至卑。衣服必卑。居所必卑。應接必卑。收利必卑。朝夕孳々。如水之求卑。天下之錢集。汝家共海無盡矣。汝夫勉諸。

○卅日 晴 當年與力共出精にて御用辨殊によろし小民を救之意ならもの辨て追々出金をいたす與力同心之御褒美にて與力之内二番目羽田鎌左衛門は銀七枚并別段三枚右之順にて筆下にも出精いたすものには銀五枚別段金五百疋遣す同心の十七歳位之もの無足のもの迄銀貳枚に成同心之別段出精之もの二人は廉々にて銀六枚に成なら奉行所大塩一件之節御褒美ありし外夫等之ことなしよつて組中大騒きにてよろこひ候こと大かたならぬ也これも 公儀御恩の故也當年公事目安高千三百十五内千三百相濟十五口戌年の残みな金公事に對談行届未決之もの二口也いづれも十二月吟味取懸也入牢いたし候盜賊博奕打三百五十二人三百四拾人

出牢落着に而殘候もの十二人内十二月十八日召捕候もの一人殘十一人は廿日過召捕候もの共也かくの如くなる故に與力同心之御褒美も無余義也乍去盜賊は百五十口訴有去年より廿口多し是は米高故なるへし來年は減すへし乍去以前に見合すれば半に減たり

くれて行としにもしのふ垂乳根よかはらて千世のはる返ませも、ひらにあまるこ金をわかちやりてこゝろたのしきとしのくれかな難波江のよしあしもなく暮て行としをはよしといはさらめやははるはとく立歸りしもあら玉のとしのはしめのあすそ待るゝ天工急促白駒鞭過隙頻驚七々季。三百俘囚判幾盡。一千訟獄斷全蠲。賜書最喜慈親健舞劍猶誇頑叟堅。歲暮山衙愈閑散。微燠興釀得初圓。清閑無吉也無凶。高臥過季任性慵。臘月春來餘八日。暖雲雨暴怪三冬。紙窓補敗童頻困。柏酒豫具婦劇重。自笑家翁徒縱逸。步庭獨愛後凋松。復亦今季何事成。徒驚白雪壓頭盈。忽過三百六旬日。留得纔殘鐘一聲。

昭和九年一月二十日印刷
昭和九年一月廿五日發行

川路聖謨文書第五
非賣品

不許
複製

編輯代表者 東京市本郷區駒込東片町三十番地 藤井甚太郎
東京市四谷區新堀江町三番地 日本史籍協會代表者
發行者 早川良吉
東京市京橋區湊町三丁目八番地一
印刷者 高橋赤次郎
東京市四谷區新堀江町三番地
發行所 日本史籍協會
電話四谷三二八七番
振替東京三九四五番





